

本間美術館所蔵の古墳時代資料

—奈良盆地の前期古墳資料を中心として—

岩本 崇・上野 祥史・谷澤 亜里・二村 真司
水野 敏典・林 弘幸・阿部 誠司

はじめに

山形県酒田市に所在する本間美術館は、庄内地方の豪商であった本間家が収集したさまざまな美術品を収蔵する。そのなかに2010（平成22）年に本間家より寄贈された考古資料が存在する。当該の考古資料は木製重箱にまとめられて収納されており、一つのコレクションをなす。とりわけ注目されるのは、数面分の三角縁神獸鏡や各種の石製品といった特筆しうる古墳時代資料が含まれる点である。それらのなかには、出土地の情報が記されている資料も散見され、奈良盆地に由来する資料が多数を占める点も無視できない。なかには複数品目が同一地点から出土したとの情報が記載されている資料もあり、その確からしさを検証しておく必要があると考える。

そこで本報告では、本間美術館所蔵の古墳時代資料について基礎的な情報を提示することを目的とする。さらに、それらの位置づけを確認したうえで、資料的な意義と評価に言及する。（岩本）

1. 資料収蔵に至るまでの経緯

本資料群は2010（平成22）年、本間家より寄贈を受け、本間美術館の館藏品となったものである。ただし、正式に寄贈される以前から館の収蔵庫で保管してきた資料群である。ここでは、本資料群が本間家所蔵となった経緯について検討を試みたい。

本間家8代の光弥は、酒田初の図書館と博物館の機能をもった施設「光丘文庫」を1925（大正14）年に創立した人物である。この光弥の周辺には美術・歴史・考古などの分野それぞれの有識者がおり、光丘文庫の創立にあたっては、本間家蔵書のほかに有識者の助言を受けて資料の購入がおこなわれたと考えられる。

その有識者のなかには、郷土史家で考古学に精通した羽柴雄輔⁽¹⁾がおり、光弥にたいして本資料群を提供、または購入を薦めた可能性がある。

さらに、本間家周辺の人物として注目されるもう一人の人物として、郷土史家の斎藤美澄⁽²⁾があげられる。斎藤は1880（明治13）年から大和国大和神社の神職となり、奈良県知事の委嘱を受けて『大和志料』[斎藤編1914]の編纂にあたった。本資料群の多くが奈良県出土で占められる点からは、資料ともっとも接点のある人物といえる。斎藤は酒田に戻ってからは、本間家の膨大な家史料を整理編纂するなど本間家のために尽力しており、8代光弥が光丘文庫を創立するにあたり、本件の考古資料を提供または購入を薦めた可能性は高い⁽³⁾。1893（明治26）年に奈良から帰郷した斎藤が、その年に出土した遺物を持ち帰れたかがわずかに疑問として残るが⁽⁴⁾、斎藤美澄を介して本間家が入手した可能性を最有力なものと考えておきたい。

とはいえ、本資料群への羽柴雄輔および斎藤美澄の関与については、具体的な文献史料がなく推測の域を出ない点には注意が必要である。光丘文庫の考古資料（現在は酒田市立資料館蔵）についても不

明な点が多く、本資料群との類似点などはみいだせない。また、羽柴雄輔と斎藤美澄は光丘文庫創立前に亡くなっていることから、光丘文庫のなかに氏らにかかわる直接的な資料は存在しない可能性が高い。二人の人物の関与についてこれ以上の情報を明らかにするには、本間家個人で所有する非公開の史料を調査する必要があるだろう。

最後に三つ目の可能性として、本資料群が美術商から持ち込まれた可能性も捨てきれない。当時は、玉石混交の山いくらで購入、という売買も多かったと聞いている。優品を入手するには、ほかの資料を買わねばならなかったという事情もあったと考える。本資料群もそうした事情でほかの資料とともに偶然、本間家へ入った可能性を考慮しておく必要があるだろう。(阿部)

2. 資料報告

本間美術館所蔵の考古資料は6箱からなる木製重箱に収納されており、それらは出土地と品目によっておおまかに整理されている。そこで、ここでは資料群の概要を収納状況に即して説明したうえで、古墳時代資料を対象に報告をおこなう。報告にあたっては、1箱分に相当する量から当該資料群の中核をなすとみられる伝・ウブコ塚の資料群、複数品目にまたがって出土地情報が記載された伝・東良山の資料群、上記2地点以外のそのほかの資料の三者に区分したうえで記述を進める。(岩本)

(1) 資料群の概要(図版1)

資料群は、6段からなる木製重箱に収納される。個々の資料は、木箱底に敷かれた布団に糸で縫い付けられた状態にある。

第一段は、「ウブコ塚」より出土したものが16点収納される。大多数が石製品(鍬形石片、石釧片など)であり、14点ある。そのほかに鏡片1点、銅鏃1点が確認される。縫い付けの糸はいずれも白色のものである。

第二段は山辺郡、式上郡、十市郡の各所から出土した遺物であり、20点が収納される。半数以上を「東良山」より出土した遺物が占め、鏡片5点、銅鏃1点、管玉8点、勾玉1点が確認される。ほかに「西殿塚」や「石上神宮禁足地」などと読み取れるラベルが5枚あり、それぞれに遺物(管玉1点、勾玉1点、瓶詰の赤色顔料)が1点ずつともなう。縫い付けの糸はいずれも白色のものである。

第三段はラベルのない出土地不明の遺物であり、63点が収納される。鉄鏃1点、銅鏃1点、刀柄片1点、馬具部品1点、鏡片1点、勾玉2点、切子玉1点、耳環2点、白玉53点であり、品目・年代ともに統一性がみられない。複数の古墳から出土した遺物が1箱におさめられているようである。縫い付けの糸はいずれも赤色である。

第四段は、第二段目と同様に、山辺郡、式上郡、十市郡の各所から出土した遺物であり、「三輪神社禁足地」や「三輪神社元祢宜白井雅茂旧蔵」との記載がラベルにある。全部で79点確認でき、その内訳は、耳環2点、銅鏡1点、空玉10点、不明金属製品1点、ガラス玉35点、銅鏃1点、管玉1点、白玉28点である。縫い付けの糸はいずれも白色のものである。

第五段は、出土地不明の石鏃が21点収納される。石材や形に統一性はない⁽⁵⁾。縫い付けの糸はいずれも赤色のものが使用されている。

第六段は、式上郡柳本村出土の石製品2点がおさめられる。1つは「雲如上人遺陵」出土の車輪石であり、もう1つは「高槻山」出土の石釧である。縫い付けの糸はいずれも白色のものである。

縫い付けの糸の色に着目してみると、出土地が確かなものは基本的に白色が使用されており、出土

地が不明のものは基本的に赤色が使用されていることに気づく。縫い付けに使用された布団や、収蔵箱そのものには違いがないことから、何かしらの意図によって糸の色の使い分けがなされたものと考えられる。(林)

(2) 伝・ウブコ塚 (図1～4、表1、図版2～4)

収蔵箱の第一段は1枚のラベルの記載に対応する資料群と考えられる。ラベルには「明治廿六年四月廿八日 大和国山辺郡朝和村大字中山ノ東殿塚一各 ウブコ塚ヨリ発見」とある。これにかんして、『奈良縣山邊郡誌』[山邊郡教育会(編)1913]によれば、東殿塚古墳について「俗二ウブ山ト云フ」との記載がある。また、『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』[奈良縣1925]においても、東殿塚古墳を別名「ウブ山」としている⁽⁶⁾。以上の点から、当該資料群は奈良県天理市中山町に所在する東殿塚古墳から出土した可能性がある。

資料群の内訳は、鏡片1点、勾玉1点、小玉1点、管玉6点、鍬形石1点、石釧2点、紡錘車形跡石製品1点、琴柱型石製品1点、筒形石製品1点、銅鏃1点である。(岩本)

① 銅 鏡 (図1、図版2・3-1)

鏡の破片が1点ある。約3.7cm×約2.6cmの長方形に近い鏡片である。厚さは1.3mm、重さは14.9gである。鋳上がりは良好。鏡面は研磨され、布が付着した痕跡が残る。鏡背面には微細な凹凸があり、明らかな仕上げの研磨は観察されない。鏡背面の凹部には赤色顔料が付着する。破面には研磨がみとめられない。

文様は内側から断面蒲鉾形の圈帯に有節重弧文を配した鈕座、内区主文部の内側に配される小乳、主像となる維綱を銜えもつ獣像がみられる。獣像は舶載三角縁神獸鏡の表現②[岸本1989]に相当する⁽⁷⁾。これをふまえて獣像に向かって左側へ小乳を配する事例を探索すると、三角縁神獸鏡目録の46鏡、74鏡、75鏡、77鏡を類例として指摘することが可能である。このうち、維綱など文様の細部に至るまで共通するのは46鏡である。46鏡で表面状態の観察しやすい京都府椿井大塚山古墳M13と比較したところ、中心から小乳の延長線上にほどこされた割付線、鈕座の外周にめぐる割付線、細かなシワ状の窪みに至るまで一致しており、「同範鏡」とであると判断しうる。46鏡は三角縁・天王日月・獸文帯四神四獸鏡(平均直径22.4cm・神獸象表現②・神獸像配置A)であり、ほかに6面の「同範鏡」がある。(岩本)

② 玉 類 (図2、表1、図版2・3-2～4)

勾玉1点、小玉1点、管玉6点がある。これらは欠損品の管玉2点を除き、連にされた状態であった。

勾 玉 翡翠製で濃緑色透明の良質な石材を素材とする。頭部に三条の刻線をもつ丁字頭勾玉で、全長33.6mmの大型品である。両側面と腹面、背面との境は滑らかに磨きこまれ、断面楕円形を呈する。片側からの穿孔が深い両面穿孔で、孔はすり鉢状に大きく開く。

小 玉 翡翠製で緑色透明を呈し、ややいびつな形状である。紐が通された状態で観察をおこなったため、孔内の状態は確認できていない。

管 玉 3は青みが強く光沢をもつ石材である。両面穿孔で、孔

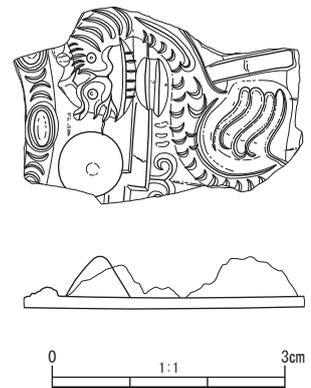


図1 伝・ウブコ塚 銅鏡

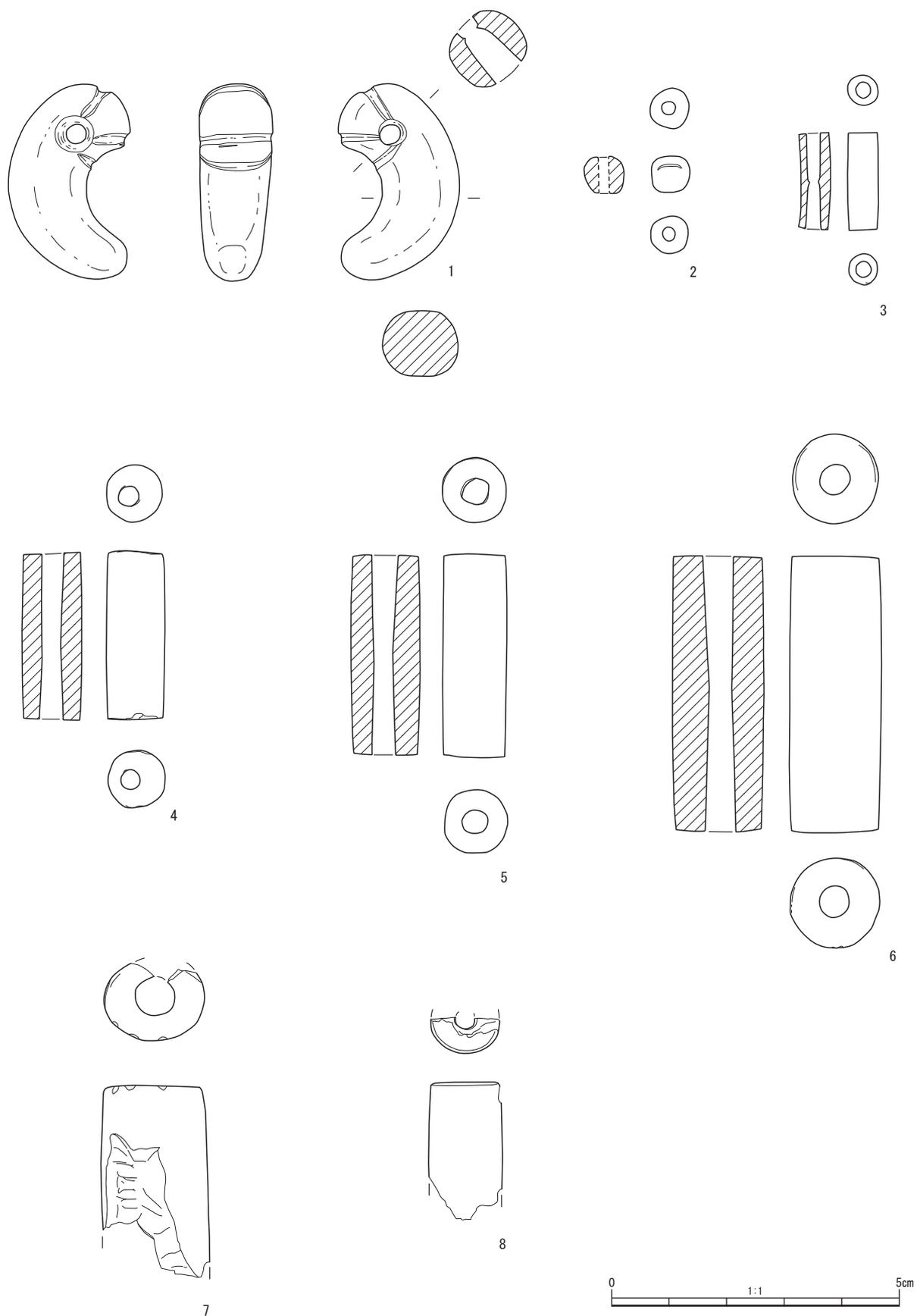


図2 伝・ウブコ塚 玉類

表1 伝ウブコ塚 玉類

| 番号 | 器種 | 材質 | 穿孔具 | 穿孔方向 | 最大径 (mm) | 最大長 (mm) | 計測値 (mm)・備考 |
|----|----|----------|------|------|----------|----------|--|
| 1 | 勾玉 | 翡翠 | 石針 | 両面 | - | - | 幅 20.20 全長 33.60 厚さ 12.7 頭部に 3 条の刻線 |
| 2 | 小玉 | 翡翠 | 観察困難 | 両面 | 7.30 | 6.65 | |
| 3 | 管玉 | (未定 C 群) | 石針 | 両面 | 5.70 | 17.50 | |
| 4 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 10.00 | 29.20 | |
| 5 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 11.40 | 35.80 | |
| 6 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 16.00 | 47.90 | |
| 7 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 18.80 | (33.85) | 欠損 |
| 8 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 12.70 | (24.35) | 欠損 |

内には石針穿孔に特徴的な回転痕がみられる。直径 5.7mm と他の個体と比べて小型で、長軸がやや湾曲する。4～8 はやや濃色の硬質緑色凝灰岩を素材とする。直径 10～20mm 程度の大型品で、鉄錐により両面穿孔される。大賀 [2013] の管玉分類では、3 は半島系、4～8 は北陸系 (領域 F) に該当する。
(上野・谷澤)

③ 鋏形石 (図 3-1、図版 2・3-5)

板状部の一部と内孔の下半が残存する破片で、残存厚は内孔の下端部で 1.6cm である。表側は内孔に沿って環体部の頂部から連続する縁取りが突出する。裏側には、突起部下端の刻線が残存しており、内孔までのびている。材質は硬質で濃緑色の緑色凝灰岩 (I 群) で⁽⁸⁾、赤色顔料は付着しない。残存部位が少なく北條芳隆による系統的整理 [北條 1994] の中に位置づけることは困難であるが、突起部が内孔横に位置することから第 3 段階以前に位置づけられる。
(二村)

④ 筒形石製品 (図 3-2、図版 2・4-6)

半周程度が残存した筒状の石製品で、直径 3.2cm、内径 2.3cm、高さ 1.9cm である。中程がわずかに窄まり上下に広がる形状を呈し、上面はふくらみをもつ一方で、下面は平坦になる。内面には水平方向に連続する穿孔痕が観察される。石材は淡緑色だが硬質な緑色凝灰岩 (II 群) で、赤色顔料は付着しない。玉杖を構成する部品と考えられる。
(二村)

⑤ 紡錘車形石製品 (図 3-3、図版 2・4-7～8)

半分程度が残存し、外径 5.4cm、高さ 1.5cm である。段形状は 3 段のうち下段が匙面状で、中・上段が階段状になる。下段の幅が中・上段よりも狭く、段の幅は不均等である。孔は上側が径 0.6cm、下側が径 0.3cm で、上側の方が下側よりも径が大きく、上側からの片面穿孔と考えられる。側面は折面状となり、谷部に刻線が周回する。材質は、濃緑色の硬質石材で (I 群)、赤色顔料は付着しない。西島庸介による編年で B 群第 1～2 段階に位置づけられる [西島 2008]。
(二村)

⑥ 石 釧 (図 3-4・5、図版 2・4-1～4)

石釧 1 (図 3-4) 環体の約 1/9 が残存する。法量の正確な復元はできないが外径約 7cm、内径約 5.5cm とみられ、高さ 1.2cm である。デザインについては、斜面は山部と谷部に刻線を彫る肋条表現を配し、側面は垂直面の中央に刻線を周回させる。頂部には加工された平坦面をもち、区画横刻は彫られない。内面形状はほぼ垂直かつ直線的で、内面には水平に連続する回転穿孔痕が観察される。

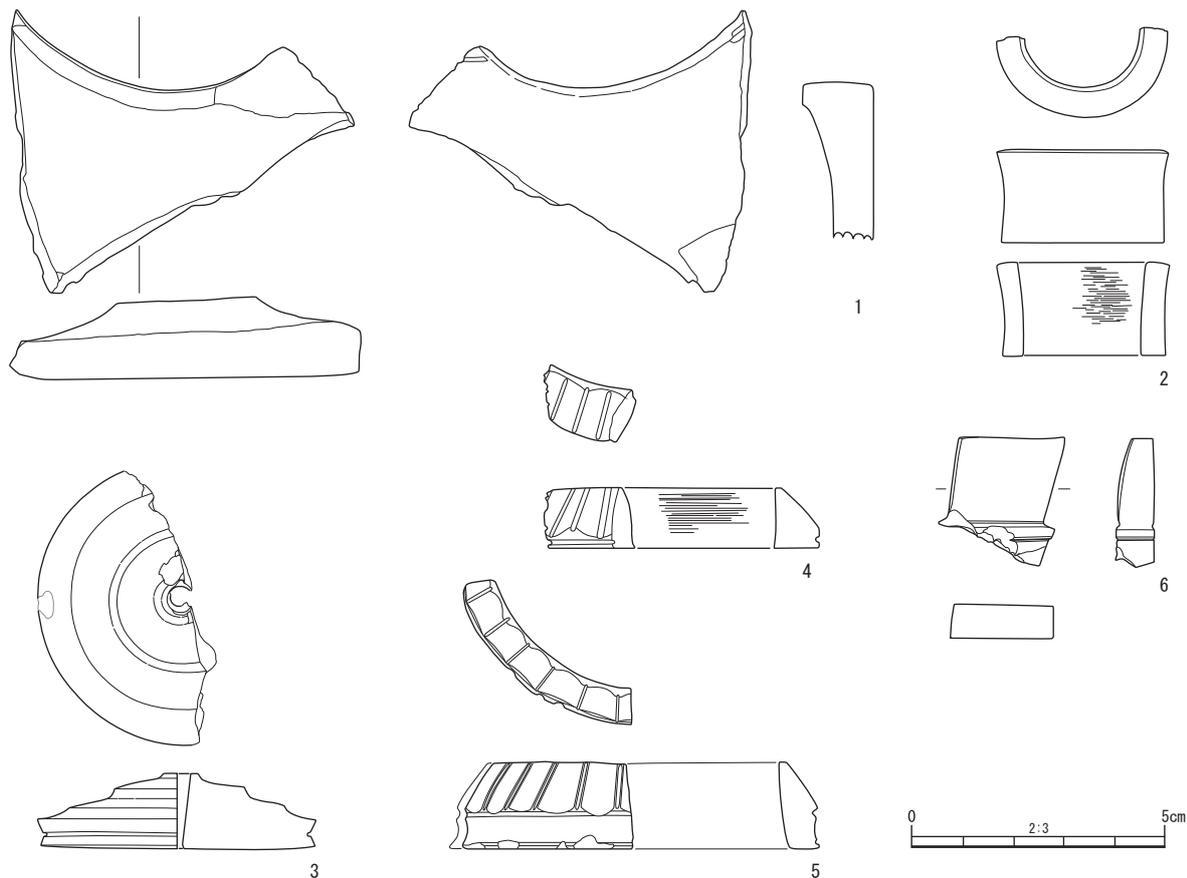


図3 伝・ウブコ塚 鋤形石・石釧・筒形石製品・紡錘車形石製品・琴柱形石製品

石材は軟質で淡緑色の緑色凝灰岩である（Ⅲ群）。赤色顔料は付着しない。筆者の分類で A-Rp2 式となり、段階Ⅲに出現する型式である [二村 2022]。

石釧 2（図3-5） 環体の約 1/5 が残存する。復元外径 7.2cm、高さ 1.7cm、最小内孔径 5.6cm で、デザインについては、斜面は山部に刻線を彫る肋条表現を配し、側面は匙面を 1 段配して下端に横刻が周回する。頂部には加工された平坦面をもち、区画横刻は屈曲部に彫られる。内面に穿孔痕はみられず、内孔最小径は内面上端にきて下へ湾曲して広がる。石材は軟質で淡緑色の緑色凝灰岩である（Ⅲ群）。赤色顔料は付着しない。筆者の分類で B-Rs2 式となり、Ⅲ期に出現する型式である [二村 2022]。
（二村）

⑦ 琴柱形石製品（図3-6、図版2・4-5）

1 対あるうち片側の角状突起の破片で、突起の基部にあたる部分も一部残存している。残存長は 2.5cm で、厚みは最大 0.8cm である。突起は基部に近づくほど厚みを増し、後ろ向きに反りをもつ。基部は外側に突出し、その上端と下端は裏面・表面ともに線刻で区画されるが、側面は下端のみに線刻を彫る。材質は硬質な緑色凝灰岩（Ⅰ群）で、赤色顔料は付着しない。亀井正道 [1973] の分類で 石上型に位置づけられる。
（二村）

③ 銅 鏃（図4、図版2・4-9）

銅鏃（銅鏃1）が 1 点ある。全長 5.2cm、重量 15.9g の鑿頭式銅鏃である。鏃身断面が円形なのが

特徴であり、刃部先端の一部を欠損するもののほぼ完形である。鍬身長は3.2cmで刃部端が鍬身の最大幅約1.1cmとなる。鍬身の平面形は、中央付近が撓んだ長方形で、側線がわずかに外反する。鍬身関は直径9.6mmのほぼ円形となる。刃部は、ほぼ均等な両鑄造りである。鍬身や刃部、鍬身端部の面は丁寧に研磨されるが付着物で研磨痕の確認できる部分は少ない。茎部は長さ1.95cm、やや先細りで、鍬身関側で幅4.9mm、厚さ5.3mmのやや縦長の円形である。側面に鑄型ズレの痕跡が残る。鍬身主軸に沿って細長い削り痕が確認でき、斜め方向の強い擦痕を残す。茎部端は折り取ったままである。副葬時に近接した鉄器の錆や粘土が部分的に付着しており、研磨痕は部分的にしか確認できない。表面の色は黒色化が進むが本来は白銅質であったとみられる。矢柄の装着痕跡は確認できない。

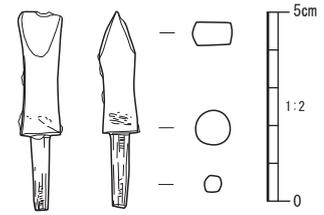


図4 伝・ウブコ塚 銅鍬

(水野)

(3) 伝・東良山 (図5～7、表2、図版5・6)

収蔵箱の第二段の一定スペースを占める資料群であり、ラベルとの対応関係が明らかな資料群である。ラベルには「曲玉 管玉 鍬 古鏡 明治廿六年五月二日 大和山辺郡朝和村大字中山ノ東良山 発出」とある。『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』では、大字中山に所在する古墳として9基が列記される〔奈良縣1925〕。このうちとりわけ注目されるのは、『奈良縣山邊郡誌』において1895(明治28)年に燈籠山古墳から「勾玉矢ノ根管玉土器人造石等数多出タリ」とする記述である〔山邊郡教育会(編)1913〕。ラベルに記載された出土年とは2年のずれがあるものの、関連性は無視しがたい。さらに、「東良山」の読みが「とうろうやま」ではないかと想定しうる点にも留意しておきたい⁽⁹⁾。したがって、当該資料群の出土地候補として、奈良県天理市中山町に所在する燈籠山古墳の可能性を指摘しておくが、確実視できるものではないことを断っておきたい。

資料群の内訳は、鏡片5点、勾玉1点、管玉9点、銅鍬1点である。(岩本)

① 銅 鏡 (図5、図版5・6-1～3)

鏡の破片が5点ある。このうち2点は接合し、それぞれの特徴から3面分の存在を確認できる。以下、鏡1～3としてそれぞれの所見を述べる。

鏡 1 接合する2片と接点をもたない1片が同一個体であると考え(図5、図版6-1)。約6.6cm×約1.6cmの破片と約2.5cm×約1.4cmの破片であり、厚さは1.3～1.4mmである。重量は11.6g(前者が9.7g、後者が1.9g)となる。鏡面はいずれも研磨するが、鏡背面には明らかな仕上げの研磨がみられない。各部の上面部分はずかに丸みを帯びるが、粗い表面状態をとどめる部分が多く、鑄上がりの問題であると考えられる。赤色顔料が付着する。破面には研磨はみとめられない。

すべて銘帯付近の破片で、内側から鋸歯文を配した断面三角形の界圏、銘帯、櫛歯文帯からなる構成である。銘文の始点と終点を3つの珠点により区画する。銘文は右回りに、「吾作明□□□□□□仙人不知□ …… □□□□飢食棗(文末記号)」となる。文末記号はゆるやかな渦文状を呈する。銘文が類似する例に25鏡、32a鏡、67鏡があり、銘文が完全に一致するのは32a鏡である。32a鏡である伝・兵庫県播磨鏡〔岩本2012〕と比較すると、「不」の第2画と第3画が交差する点、「知」の口の内部が範傷でわずかに盛り上がる点などが共通しており、「同範鏡」と判断できる。32a鏡は三角縁吾作四神四獣鏡(直径22.4cm・神獸象表現⑦・神獸像配置E)であり、ほかに「同範鏡」が1面ある。なお、伝・東良山鏡は伝・播磨鏡より範傷が少なく、鑄造順序は先行するものとみられる。

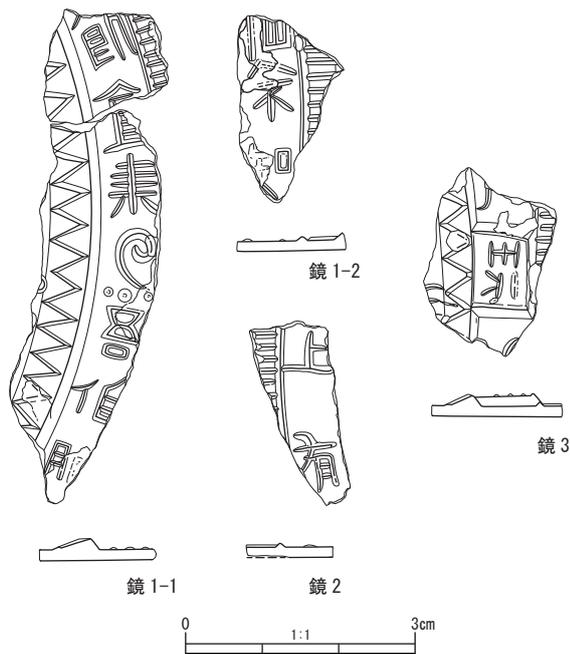


図5 伝・東良山 銅鏡

鏡 2 約2.5cm×約1.0cmの小片である(図5、図版6-2)。厚さは1.3mm、重量は1.4gである。铸上がりは良好。鏡面を研磨するが、鏡背面の各部細線の頂部は鋭い形状をとどめており、仕上げの研磨がみとめられない。赤色顔料が薄く付着する。破面の研磨はみられない。

銘帯とその外周に櫛歯文帯が確認され、銘文は左回りに「上有」の2文字が铸出される。鏡背面に明瞭な仕上げの研磨がない特徴から、三角縁神獸鏡の破片と判断される。三角縁神獸鏡のなかでも、左回りに「上有」とあるのは、26鏡、28鏡、29鏡、30鏡、32鏡、34鏡、35鏡、36鏡、59鏡である。鏡2は、「上」の第3画のなかほどが上にカーブする点、「有」の第1画が始点から屈曲する点、第4画が第1画に重なる点、第3画が第1画より離れる点などから、52鏡の「同範鏡」と考えられる。52鏡は三角縁陳是作四神四獸鏡

(平均直径22.0cm・神獸像表現⑥・神獸像配置A)であり、ほかに2面の「同範鏡」がある。

鏡 3 約2.5cm×約1.6cmの小片である(図5、図版6-3)。厚さは1.2～1.3mm、重量は3.8gである。铸上がりは良好。鏡面を研磨するが、鏡背面は鋸歯文の上面に微細な凹凸があり、仕上げの研磨は確認できない。赤色顔料が付着する。破面の研磨はみられない。

方格に「天王」2文字が铸出され、内側に鋸歯文を配した断面三角形の界圈、外側に櫛歯文帯がめぐる。方格の両脇には文様を構成する細線を確認できる。また、界圈に重なるように獸像の爪の表現とおぼしき細線がみとめられる。文様構成から三角縁神獸鏡と判断できる。方格銘は左回りで、「天」は字形分類の元類に相当することから〔雨宮2019〕、69鏡、70鏡、71鏡が類例となる。さらに、獸像の爪とみられる表現と方格の位置関係、「天」の右側にあるごく小さな範傷が一致することから、71鏡の「同範鏡」と判断できる。71鏡は三角縁・天王・日月・獸文帯四神四獸鏡(平均直径22.0cm・神獸像表現②・神獸像配置F1)であり、ほかに「同範鏡」は1面のみある。(岩本)

② 玉 類 (図6、表2、図版5・6-5)

勾玉1点、管玉9点があり、すべてが連にされた状態であった。

勾 玉 翡翠製で頭部に三条の刻線をもつ丁字頭勾玉である。石材は鮮緑色半透明を呈し、白色不透明となる部分を含む。孔は大きく開き、すり鉢状の両面穿孔である。

管 玉 複数の種類で構成される。2・4・8・9は緑色凝灰岩を素材とし、鉄錐により両面穿孔される。法量は直径6～12mmのあいだにばらつくが、大型品の範疇である。

7も緑色凝灰岩製で鉄錐により両面穿孔されるが、直径3.55mmと小型でやや細長いプロポーシオンを呈する。

5・10は濃緑色の花仙山産碧玉を素材とする。鉄錐により両面穿孔され、孔は開口部の径が大きく断面V字状を呈する。直径8mm、全長33mm程度で、やや縦長のプロポーシオンを呈する。

3・6は両面穿孔で、孔内には石針穿孔に特徴的な回転痕が確認される。3は直径11.2mmの大

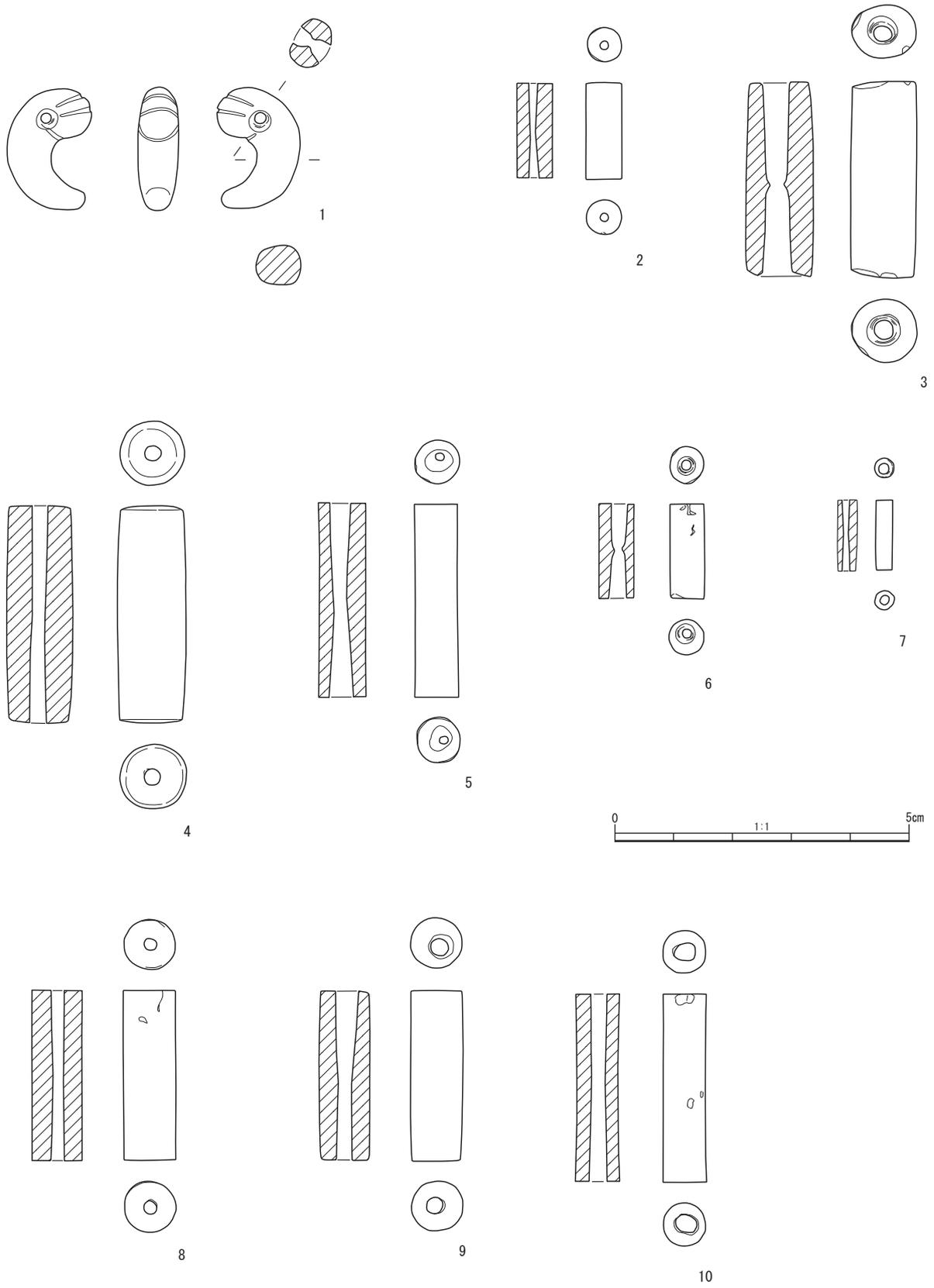


図6 伝・東良山 玉類

表2 伝・東良山 玉類

| 番号 | 器種 | 材質 | 穿孔具 | 穿孔方向 | 最大径 (mm) | 最大長 (mm) | 計測値 (mm)・備考 |
|----|----|----------|------|------|----------|----------|-----------------------------------|
| 1 | 勾玉 | 翡翠 | 石針 | 両面 | - | - | 幅13.80 全長21.35 厚さ7.30 頭部に3条の刻線 |
| 2 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 観察困難 | 両面 | 6.35 | 16.85 | |
| 3 | 管玉 | (未定C群) | 石針 | 両面 | 11.20 | 33.50 | 一方の端面が凹面 |
| 4 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 11.55 | 37.30 | |
| 5 | 管玉 | 碧玉 (花仙山) | 鉄錐 | 両面 | 7.90 | 33.30 | |
| 6 | 管玉 | (未定C群) | 石針 | 両面 | 6.00 | 16.70 | |
| 7 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 3.55 | 12.35 | |
| 8 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 観察困難 | 両面 | 8.80 | 28.90 | |
| 9 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 8.85 | 29.45 | |
| 10 | 管玉 | 碧玉 (花仙山) | 鉄錐 | 両面 | 7.85 | 32.20 | |

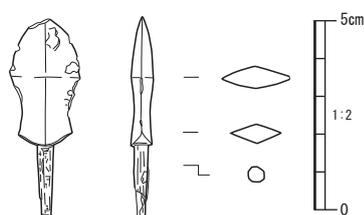


図7 伝・東良山 銅鏃

型品で、石材はやや青みが強く光沢をもつ。両端面が長軸に斜行し、一方の端面は凹面を呈する。6は直径6.0mmと比較的小型で、3と比較すると石材の青みがやや弱い。両端面が長軸にわずかに斜行する。

大賀〔2013〕の管玉分類では、2・4・8・9が北陸系の領域F、7が北陸系の領域Se、5・10が山陰系の領域JFb、3・6が半島系に該当する。(上野・谷澤)

③ 銅 鏃 (図7、図版5・6-5)

銅鏃1点(銅鏃2)がある。十字鏃をもつ柳葉式銅鏃である。残存長5.2cm、重量10.5g、鏃身先端および刃部端が小さく欠損するが、ほぼ完形である。鏃身は柳葉式を基調とするが、鏃身最大幅で強く屈曲し、横鏃と接する。鏃身は長さ3.3cm、最大幅1.8cmであり、鏃身下半では鏃身幅を狭めたのちに外反し、鏃身関で幅1.4cmとなり、鋭く屈曲する。鏃身の中央に沿って縦鏃が入る。鏃の交差する部分は稜がやや緩い。縦鏃に沿って鏃身は、鏃の交差する部分で一番分厚く、5.9mmとなり、関に向かって鏃身幅に応じて厚さは薄くなり、もっとも薄い部分で4.5mmになったのち、鏃身尻で厚みを増して厚さ5.8mmとなる。鏃身と茎部の境には明瞭な段差をもつ。鏃身尻の平面形は突出が強くなるなどの変形はみとめられない。鏃身尻の端面は丁寧に削られ平滑な面で、擦痕を残す。鏃身の研磨は全体に丁寧にこなされるが、一部に縦方向の擦痕が残る。茎部は長さ1.9cmで鏃身関から約0.5cmまで太さはあまり変わらず、幅と厚さは約0.4cmで、断面は多角形である。茎部の下半は先細りとなり、茎部端は鑿などが上下から打ち込まれて、折り取られたままである。茎部表面には、鏃の主軸に沿って細長い削り痕が多数確認でき、横方向の擦痕が残る。銅鏃表面は、錆により黒色化が進む、本来は白銅質とみられる。部分的に粘土状の付着物があり、全体に斑状の錆があるが遺存状況は良好である。矢柄痕跡は確認できない。(水野)

(4) そのほかの資料 (図8~12、表3~5、図版6~8)

本間美術館所蔵の古墳時代資料には伝・ウブコ塚ならびに伝・東良山以外の資料も存在する。そのなかには出土地の情報がラベルに付された資料も少なからず存在するが、資料群としてのまとまりをなす例はみとめられない。したがって、以下では品目ごとに資料紹介をおこない、その過程で出土地の記載のある例については紹介することとする。(岩本)

① 銅 鏡 (図8、図版7-1)

収蔵箱の第三段に鏡の破片が1点ある。ラベルなどが存在しておらず、出土地不明の資料となる。約5.3cm×約2.5cmの半円形に近い鏡片である。厚さは1.8mm前後、重さは17.1gである。全体に文様の表出は先鋭ではないうえに、獣像の顔面付近に鋳引けがみられる。鏡面は研磨されるが、鏡背面は微細なシワがみられるなど粗い表面状態をとどめており、明らかな仕上げの研磨は観察されない。鏡背面に鉄錆に由来するとみられる色調の変化がある。破面には研磨がみとめられない。

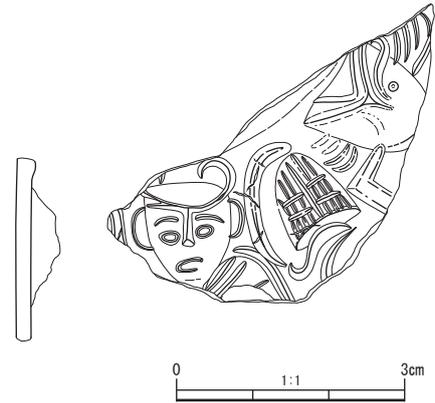


図8 出土地不明 銅鏡

文様はもつとも内側に鈕座に由来する膨らみがあり、その外側に神獣像と薫炉が配される。神獣像は頭部付近に限定されるが、神像には大きく伸びる雲気がともない、獣像は維綱を銜える表現をもつ。神像の特徴的な雲気から、三角縁神獣鏡の表現⑬に相当する例と判断できる。薫炉はやや小さめながら三段表現のものであり、これも表現⑬に特徴的である。表現⑬にあたる131a鏡、132鏡、133鏡、138鏡のうち、細部に至るまでの文様が共通するのは138鏡である。さらに、獣像顔面付近の鋳引けも一致することから、138鏡と「同範鏡」であると判断できる。138鏡は三角縁波文帯三神四獣鏡（平均直径20.9cm・神獣象表現⑬・神獣像配置特殊）であり、ほかに2面の「同範鏡」がある。
(岩本)

② 玉 類 (図9、表3～5、図版6・7)

勾玉3点、管玉4点、水晶製切子玉1点、ガラス小玉35点、滑石製白玉81点がある。

勾玉 (図9-1～3、表3、図版6-8) 1は収蔵箱の第二段にあり「大和国十市郡櫻井村伊勢屋作治郎旧蔵」のラベルをともなう。紫水晶製の小型品で、鉄錐により両面穿孔される。2・3は第三段にあり、ラベルをともなわず出土地は不明である。2は緑色半透明の石材による小型品で両面穿孔。3は黄緑色半透明の石材による大型品で片面穿孔。これらの勾玉は、その特徴から先行研究で設定された「系」へと帰属させるのが難しい。

管玉 (図9-4～7、表3、図版6-6・7) 4は収蔵箱の第四段にあり、「山辺郡朝和村字萱生」のラベルをともなう。青みが強く光沢をもつ石材で、直径5.5mmの小型品。石針により両面穿孔され、端面が長軸に斜行する。5～7は収蔵箱の第二段に並べておさめられていた。5は「大和国山辺郡石上神宮禁足地内発出」のラベルをともなう。やや濃色の緑色凝灰岩製で、直径8.9mmの太型品である。鉄錐により両面穿孔される。6は「式上郡朝倉村大字慈恩寺某旧蔵」、7は「大和国山辺郡朝和村大字中山ノ西殿塚発出」のラベルをともなう。いずれも濃緑色の花仙山産碧玉製で、直径9mm前後の太型品である、鉄錐による片面穿孔で、端面の穿孔到達部は円錐形に剥離した後に研磨がなされている。以上の管玉は、大賀[2013]の分類では4が半島系、5が北陸系の領域F、6・7が山陰系の領域JFaに該当する。

水晶製切子玉 (図9-8、表3、図版6-8) 収蔵箱の第三段にあり、ラベルをともなわず出土地は不明である。六角錐台を底面であわせた形状で、鉄錐により片面穿孔される。高さ26.85mm、最大径は六角形の頂点間で計測した場合16.65mm、辺間で計測した場合15.30mmとなる大型品である。穿孔到達側の端面に欠損がみられる。山陰系[大賀2009]の玉である。

ガラス小玉 (表4、図版7-2) 35点が連にされた状態で収蔵箱の第四段におさめられていた。「式

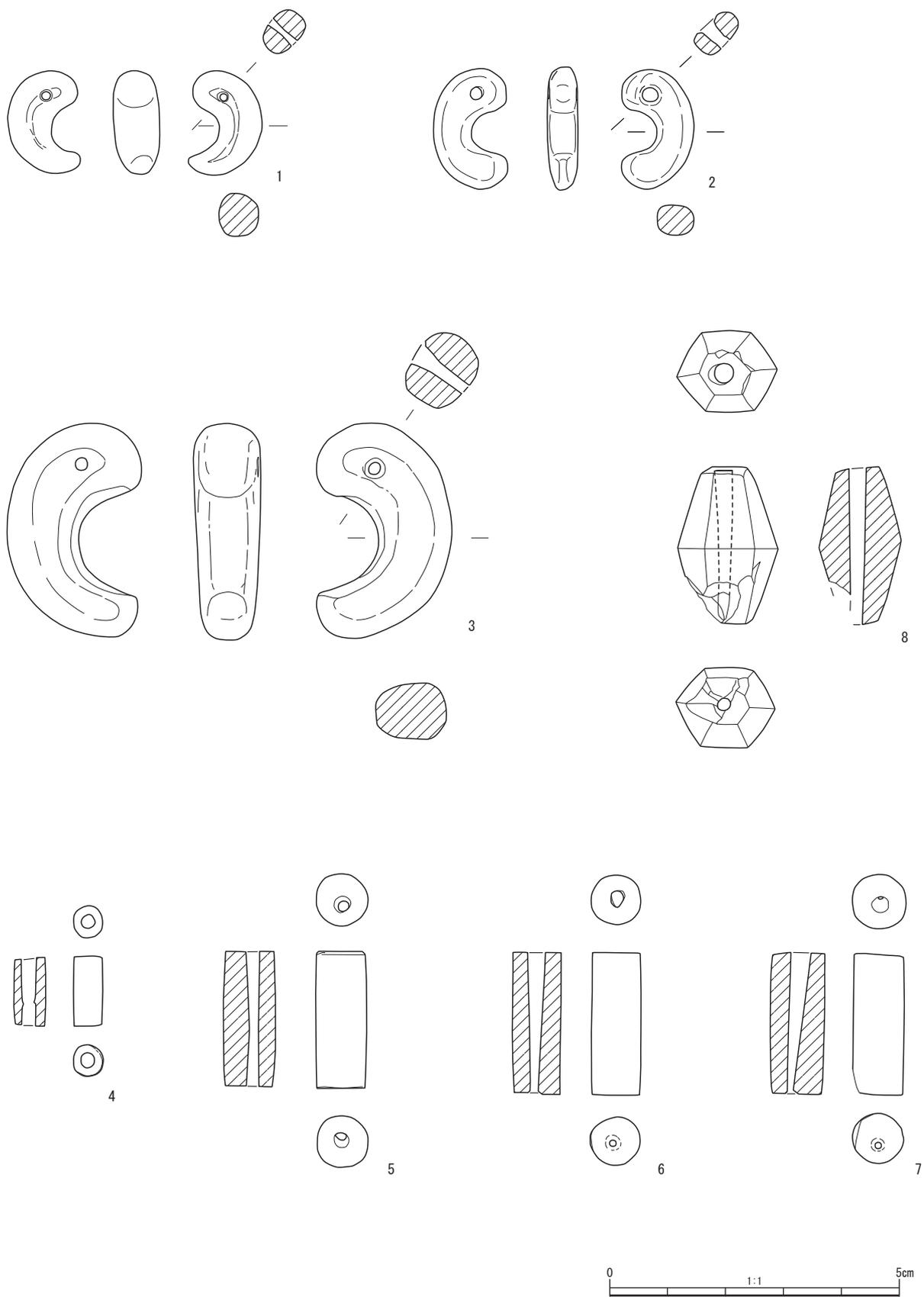


図9 そのほかの玉類 (勾玉・管玉・切子玉)

表3 そのほかの玉類（勾玉・管玉・切子玉）

| 番号 | 器種 | 材質 | 穿孔具 | 穿孔方向 | 最大径 (mm) | 最大長 (mm) | 計測値 (mm)・備考 |
|----|-----|-----------|-----|------|----------|----------|---|
| 1 | 勾玉 | 紫水晶 | 鉄錐 | 両面 | - | - | 幅 12.70 全長 18.40 厚さ 7.75 大和国十市郡櫻井村伊勢屋作治郎旧蔵 |
| 2 | 勾玉 | 石製（緑色半透明） | 鉄錐 | 片面主 | - | - | 幅 20.35 全長 13.30 厚さ 5.70 出土地不明 |
| 3 | 勾玉 | 石製（黄緑色透明） | 鉄錐 | 片面 | - | - | 幅 22.80 全長 38.10 厚さ 12.00 出土地不明 |
| 4 | 管玉 | （未定 C 群） | 石針 | 両面 | 5.50 | 12.70 | 山辺郡朝和村字萱生 |
| 5 | 管玉 | 硬質緑色凝灰岩 | 鉄錐 | 両面 | 8.90 | 23.60 | 大和国山辺郡石上神宮禁足地内発出 |
| 6 | 管玉 | 碧玉（花仙山） | 鉄錐 | 片面 | 8.80 | 24.90 | 式上郡朝倉村大字慈恩寺某旧蔵 |
| 7 | 管玉 | 碧玉（花仙山） | 鉄錐 | 片面 | 9.40 | 25.00 | 大和国山辺郡朝和村大字中山ノ西殿塚発出 |
| 8 | 切子玉 | 水晶 | 鉄錐 | 片面 | 16.65 | 26.85 | 一方の端面に欠損、出土地不明 |

表4 そのほかの玉類（ガラス小玉）

| 番号 | 製作技法 | 色調 | 直径 (mm) | 厚さ (mm) | 備考 | 番号 | 製作技法 | 色調 | 直径 (mm) | 厚さ (mm) | 備考 |
|----|-------|--------|---------|---------|------------|----|-------|--------|---------|---------|--------------------|
| 1 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 5.80 | 3.60 | 両端面研磨、色調濃い | 19 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 5.90 | 4.30 | 両端面研磨 |
| 2 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 6.50 | 3.20 | 両端面研磨 | 20 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 4.10 | 4.20 | 両端面研磨 |
| 3 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 5.35 | 3.25 | 両端面研磨 | 21 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 3.75 | 3.80 | 両端面研磨 |
| 4 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 6.00 | 4.50 | 両端面研磨 | 22 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 4.40 | 2.90 | 両端面研磨 |
| 5 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 5.20 | 4.80 | 両端面研磨、色調濃い | 23 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 4.80 | 4.70 | 両端面研磨 |
| 6 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 4.40 | 3.30 | 両端面研磨 | 24 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 6.40 | 3.55 | 両端面研磨 |
| 7 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 5.80 | 4.00 | | 25 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 5.70 | 3.30 | 両端面研磨 |
| 8 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 5.30 | 2.90 | 両端面研磨、色調濃い | 26 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 4.45 | 3.70 | 両端面研磨 |
| 9 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 4.60 | 4.70 | 両端面研磨 | 27 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 4.70 | 3.70 | 両端面研磨 |
| 10 | 引き伸ばし | 濃青色透明 | 4.50 | 4.30 | 両端面研磨 | 28 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 3.80 | 3.15 | 両端面研磨 |
| 11 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 5.00 | 3.30 | 両端面研磨 | 29 | 巻き付け | 白色不透明 | 6.00 | 5.20 | 中世以降か |
| 12 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 4.30 | 2.30 | 色調淡い | 30 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 5.80 | 4.30 | 両端面研磨 |
| 13 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 6.10 | 3.90 | 両端面研磨 | 31 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 5.10 | 7.10 | 両端面研磨 |
| 14 | 引き伸ばし | 淡青色透明 | 4.00 | 3.40 | 両端面研磨 | 32 | 引き伸ばし | 淡青色透明 | 6.10 | 5.30 | 両端面研磨 |
| 15 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 5.90 | 4.20 | 両端面研磨 | 33 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 9.00 | 4.60 | 孔と平行する白色筋 |
| 16 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 4.30 | 3.85 | 両端面研磨 | 34 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 7.50 | 7.00 | 孔と平行する白色筋 両端面研磨 |
| 17 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 4.10 | 3.15 | 両端面研磨 | 35 | 引き伸ばし | 青紺色透明 | 9.70 | 7.40 | 孔と平行する白色筋 |
| 18 | 引き伸ばし | 淡青色半透明 | 4.20 | 3.50 | 両端面研磨 | | | | | | |

上郡柳本村古墳発出但大者五箇、萱生邑古冢」のラベルをともなう。後世の混入品とみられる白色不透明で巻き付け技法による1点(29)を除き、引き伸ばし技法で製作されたものである。直径4～6mm程度のものが多数を占め、両端面の研磨が進行し白状を呈する個体が目立つ。目視からの判断であるが、銅着色による淡青色のもの13点、銅とマンガンにより複合的に着色される濃青色のもの1点、コバルト着色による青紺色のもの20点を数える。銅着色のものは、透明度があまり高くなく高Alソーダ石灰ガラス(Oga and Tamura [2013]のGroup S II)が主体だが、透明度が比較的高くカリガラス(Group P II)とみられるものが2点ある。コバルト着色のものは目視から基礎ガラスのグループを判別するのが難しいが、カリガラスのものとソーダガラスのものが混在しているとみられる。なかでも直径7～10mm程度の大型品3点(33・34・35)は、孔と平行方向の白色の気泡筋が顕著であるという特徴から、植物灰ガラス(Group S III B)とみられる。

滑石製白玉(表5、図版7-3・4) 収蔵箱の第三段と第四段に1連ずつ存在する。第三段の1連は53点からなり、出土地は不明である。第四段の1連は28点からなり、「同国三輪神社禁足地」のラベルをともなう。この連には直径10.50mmで厚い円盤状を呈する大型品が1点含まれる。これを除けば、どちらの連も直径4～7mm程度のものからなる。石材は黒色に近いものや灰色のもの、やや淡い黄灰色のものといったヴァリエーションがあり、形態的にも側面に稜を明確につくりだすものから、稜が不明瞭で筒状のものまで多様性がみられる。第3段の連は黄灰色で筒状を呈し研磨が粗い

表5 そのほかの玉類（滑石製白玉）

| 修造箱 | 番号 | 色調 | 直径 (mm) | 厚さ (mm) | 修造箱 | 番号 | 色調 | 直径 (mm) | 厚さ (mm) | 修造箱 | 番号 | 色調 | 直径 (mm) | 厚さ (mm) |
|-----|----|-----|------------|------------|-----|----|-----|------------|------------|-----|----|-----|------------|------------|
| 第3段 | 1 | 黒灰色 | 5.30 | 2.10 | 第3段 | 28 | 黄灰色 | 5.90 | 3.60 | 第4段 | 2 | 褐灰色 | 5.80 | 2.20 |
| 第3段 | 2 | 灰色 | 4.70 | 2.50 | 第3段 | 29 | 黄灰色 | 6.10 | 4.15 | 第4段 | 3 | 黒灰色 | 5.80 | 2.50 |
| 第3段 | 3 | 灰色 | 4.60 | 2.70 | 第3段 | 30 | 灰色 | 4.90 | 2.80 | 第4段 | 4 | 灰色 | 5.65 | 2.80 |
| 第3段 | 4 | 灰色 | 5.65 | 2.70 | 第3段 | 31 | 褐灰色 | 5.20 | 3.50 | 第4段 | 5 | 黒灰色 | 5.70 | 2.45 |
| 第3段 | 5 | 灰色 | 4.60 | 2.90 | 第3段 | 32 | 黄灰色 | 6.10 | 4.20 | 第4段 | 6 | 黄灰色 | 5.55 | 2.40 |
| 第3段 | 6 | 黒灰色 | 4.50 | 2.60 | 第3段 | 33 | 黒灰色 | 4.50 | 2.85 | 第4段 | 7 | 灰色 | 4.90 | 2.80 |
| 第3段 | 7 | 黒灰色 | 5.30 | 2.70 | 第3段 | 34 | 灰色 | 4.30 | 3.45 | 第4段 | 8 | 灰色 | 5.80 | 2.85 |
| 第3段 | 8 | 灰色 | 4.90 | 2.45 | 第3段 | 35 | 灰色 | 5.60 | 3.10 | 第4段 | 9 | 灰色 | 4.80 | 1.90 |
| 第3段 | 9 | 黒灰色 | 4.60 | 4.10 | 第3段 | 36 | 黄灰色 | 5.80 | 2.90 | 第4段 | 10 | 黄灰色 | 4.95 | 2.50 |
| 第3段 | 10 | 黄灰色 | 5.90 | 2.90 | 第3段 | 37 | 黒灰色 | 5.15 | 4.40 | 第4段 | 11 | 黒灰色 | 4.80 | 2.20 |
| 第3段 | 11 | 灰色 | 5.10 | 3.60 | 第3段 | 38 | 黄灰色 | 6.30 | 4.45 | 第4段 | 12 | 黒灰色 | 4.50 | 2.50 |
| 第3段 | 12 | 黄灰色 | 6.00 | 3.20 | 第3段 | 39 | 黄灰色 | 6.00 | 3.70 | 第4段 | 13 | 黒灰色 | 4.20 | 3.70 |
| 第3段 | 13 | 灰色 | 4.65 | 2.40 | 第3段 | 40 | 褐灰色 | 7.45 | 6.30 | 第4段 | 14 | 黒灰色 | 4.65 | 2.90 |
| 第3段 | 14 | 黄灰色 | 6.10 | 3.80 | 第3段 | 41 | 黄灰色 | 6.45 | 3.60 | 第4段 | 15 | 黒灰色 | 4.00 | 2.20 |
| 第3段 | 15 | 黄灰色 | 5.55 | 3.05 | 第3段 | 42 | 黄灰色 | 6.10 | 2.65 | 第4段 | 16 | 黒灰色 | 3.80 | 2.15 |
| 第3段 | 16 | 黄灰色 | 4.80 | 2.95 | 第3段 | 43 | 灰色 | 5.50 | 3.05 | 第4段 | 17 | 黒灰色 | 4.55 | 1.85 |
| 第3段 | 17 | 黒灰色 | 5.00 | 3.30 | 第3段 | 44 | 黄灰色 | 7.20 | 3.75 | 第4段 | 18 | 黄白色 | 4.30 | 1.85 |
| 第3段 | 18 | 灰色 | 5.20 | 3.20 | 第3段 | 45 | 黄灰色 | 6.05 | 3.60 | 第4段 | 19 | 黒灰色 | 4.10 | 1.85 |
| 第3段 | 19 | 黄灰色 | 5.15 | 4.20 | 第3段 | 46 | 灰色 | 7.15 | 3.70 | 第4段 | 20 | 黒灰色 | 4.30 | 2.30 |
| 第3段 | 20 | 黄灰色 | 6.30 | 2.80 | 第3段 | 47 | 黒灰色 | 5.15 | 2.00 | 第4段 | 21 | 黒灰色 | 4.00 | 2.30 |
| 第3段 | 21 | 灰色 | 4.40 | 3.10 | 第3段 | 48 | 黄灰色 | 5.60 | 3.30 | 第4段 | 22 | 灰色 | 4.55 | 3.35 |
| 第3段 | 22 | 黄灰色 | 5.95 | 2.90 | 第3段 | 49 | 黄白色 | 5.25 | 1.50 | 第4段 | 23 | 黒灰色 | 4.20 | 2.30 |
| 第3段 | 23 | 黄灰色 | 6.20 | 2.70 | 第3段 | 50 | 黒灰色 | 4.55 | 2.60 | 第4段 | 24 | 黒灰色 | 4.20 | 2.00 |
| 第3段 | 24 | 灰色 | 4.70 | 3.45 | 第3段 | 51 | 黄灰色 | 5.60 | 3.00 | 第4段 | 25 | 黒灰色 | 3.80 | 2.95 |
| 第3段 | 25 | 灰色 | 4.95 | 3.70 | 第3段 | 52 | 黄白色 | 4.90 | 2.55 | 第4段 | 26 | 黒灰色 | 4.20 | 2.25 |
| 第3段 | 26 | 黄灰色 | 5.85 | 4.50 | 第3段 | 53 | 灰色 | 4.60 | 2.00 | 第4段 | 27 | 黒灰色 | 4.05 | 1.90 |
| 第3段 | 27 | 黄灰色 | 5.80 | 4.50 | 第4段 | 1 | 黒灰色 | 10.50 | 4.85 | 第4段 | 28 | 黒灰色 | 3.90 | 2.35 |

もの、第4段の連は黒灰色で稜が明瞭なものが比較的多い。

(上野・谷澤)

③ 石製品 (図10、図版8)

収蔵箱の第六段に車輪石が1点、石釧が1点あり、両資料にラベルが付いている。車輪石のラベルには、「学名 車輪石 大和国式上郡柳本村釜口山普賢院住曇如上人遺愛」、石釧のラベルには「学名 環石 大和式上郡柳本村字長岡ノ高槻山発出」と記載されている。

「曇如上人遺愛」車輪石 (図10-1、図版8-1) 外形と内孔形ともに卵形を呈する完形品で、長径10.9cm、短径9.5cm、高さ1.2cm、内長径5.8cm、内短径5.5cm、重量80.6gである。デザインは斜面に肋条装飾を配し、山部と谷部に刻線が彫られる。肋条装飾と刻線は、側面及び底面外周にまで延長され、上から見ると外形の輪郭線の凹凸が強調される。底面は高さ0.4cmの上げ底が形成されており、一部の区間では内面との境界が面取りされる。内面には水平方向に連続する穿孔痕がみられるが、一部の区間では上側からの研磨により消失している。内孔最小径は内面の下端にきて、穿孔痕がある区間では直線的に、消失している区間では湾曲してわずかに上へ広がる。回転を用いた穿孔後に、研磨によって内孔を拡張して卵形を作出していると考えられる。石材は硬質で濃緑色の緑色凝灰岩で (I群)、黒色の流理構造がみられる。赤色顔料の付着はみられない。外形の特徴と上げ底をもつ点から、三浦俊明による編年で第I段階に該当する [三浦2005]。

「高槻山」出土石釧 (図10-2、図版8-2) 完形品で、外径7.8cm、高さ1.9cm、最小内孔径5.3cm、重量57.6gで、デザインは斜面に陰刻の櫛歯状装飾を、側面に匙面を1段配する。また、斜面は匙面2条からなる装飾帯が四方に配され、櫛歯状装飾を区画している。頂部には加工された平坦面を持ち、区画横刻は屈曲部に彫られる。内面には水平方向の擦痕が観察されるが、連続性に欠け穿孔痕はないと考えられる。内孔最小径は上端にきて下へ湾曲して広がる。石材は軟質で淡緑色の緑色凝灰

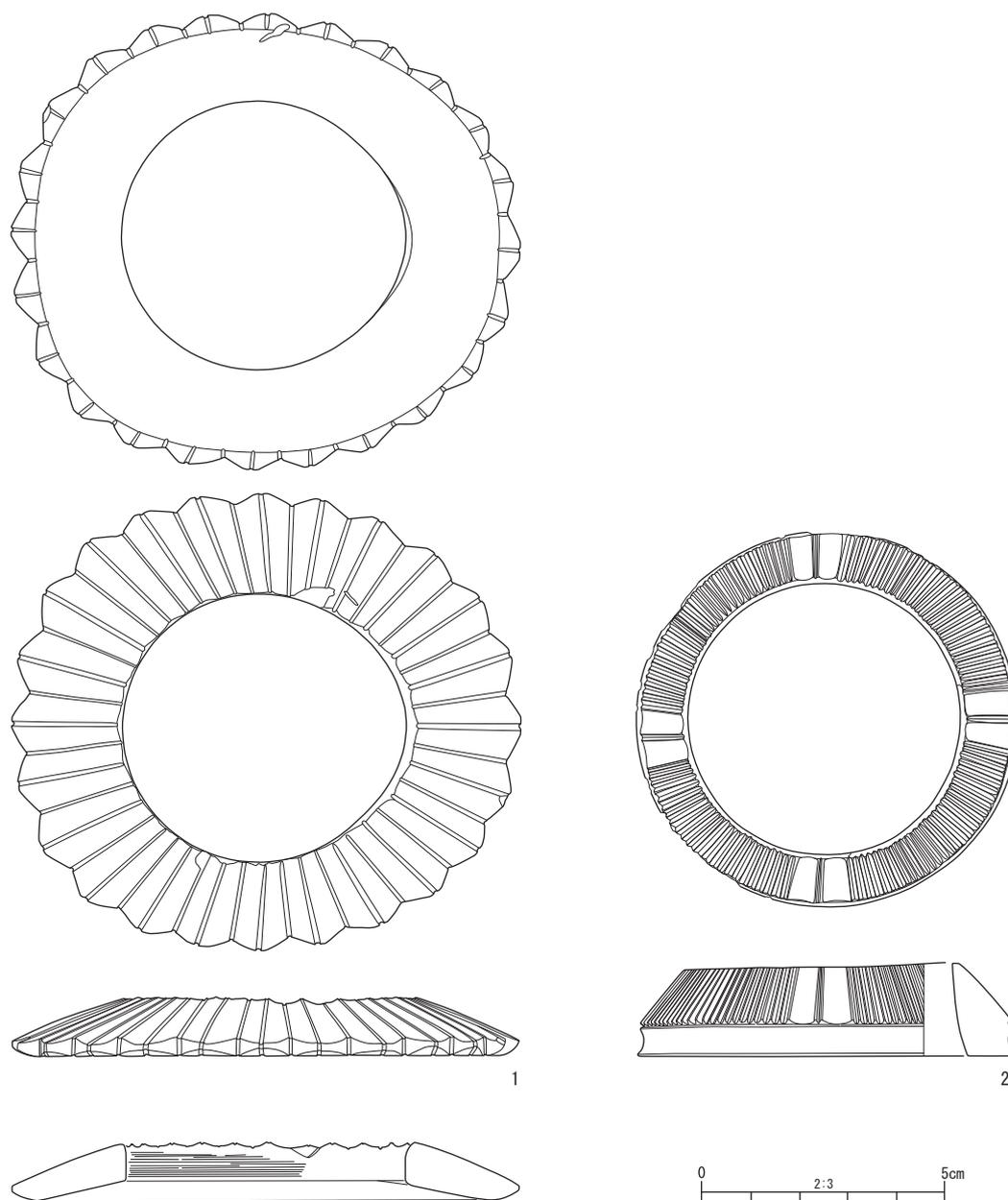


図10 「曇如上人遺愛」車輪石(左)・「高槻山」出土石釧(右)

岩である(Ⅲ群)。赤色顔料の付着はみられない。筆者の分類でB-Ks2式となり、段階Ⅲで出現する型式である[二村2022]。(二村)

④ 銅鏃・鉄鏃 (図11、図版7-7)

銅鏃2点(銅鏃3・銅鏃4)と鉄鏃1点(鉄鏃1)がある。第三段に収納されたのは銅鏃1点と鉄鏃1点で、出土地を示すラベルはない。第四段に銅鏃1点(銅鏃4)があり、「大和国式部郡柳本村古墳発出」とのラベルがある。

銅鏃3 銅鏃は柳葉式銅鏃である。残存長5.7cmで、重量10.3gで、鏃身先端や刃部が小さく欠けるが、全長5.8cmほどに復元でき、ほぼ完形品である。鏃身平面形は、鏃身側線が緩いS字状カーブを描く典型的な柳葉式であり、鏃身関付近で明確な屈曲をもつ。鏃身の鏃身先端が小さく欠け

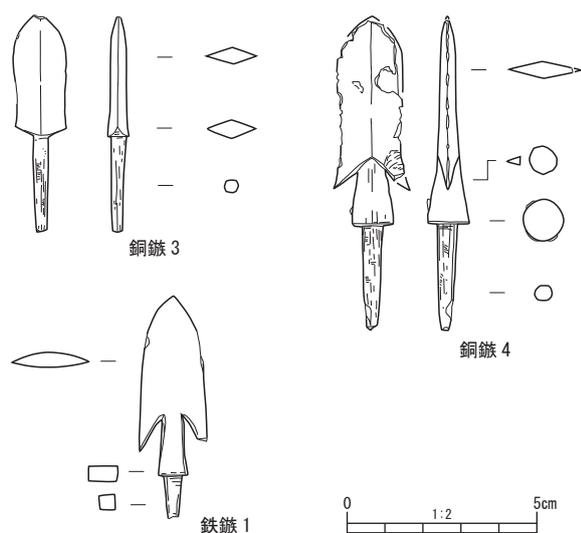


図 11 そのほかの銅鏃・鉄鏃

ており、残存鏃身長は 3.1cm であるが、3.2cm 程に復元できる。鏃身最大幅は 1.4cm であり、鏃身下半に向かってゆるやかに幅を狭め、鏃身関付近で鏃身幅を広げて約 1.3cm となり、刃部最大幅がやや広く、鏃身関の幅が鏃身最大幅に近い形態である。鏃身尻の面は平坦で、平面形も特に突出しない。鏃の主軸に沿った鑄をもつが鏃身尻の頂部と微妙にズレる。側面からみると、鏃身最大幅付近で最大厚 4.6mm となり、やや厚さを減じてから鏃身尻中央付近で 5.0mm となり、鏃身関付近が一番厚みをもつ。鏃身の断面形は扁平な菱形である。鏃身尻の端面は丁寧に削られて平滑な面となる。鏃身と茎部の境は明確な段差をもつ。茎部は、長さ 2.6cm と鏃身長

長に対して長めである。鏃身関と接する部分は幅 4.0mm とやや削られて細くなるが、茎部端に向かって 8mm 程は太さの変化は顕著でなく、断面は幅 4.5mm、厚さ 4.0mm とやや幅広な円形となる。茎部はそれより頸部端に向かってゆるやかに先細りとなる。茎部端は、折り取られたままで縁のみがわずかに削られている。茎部は鏃の主軸に沿って細長い削り痕が確認でき、横方向の擦痕を残す。矢柄痕跡はない。全体に錆が薄く付着するが、一部は赤褐色化する。遺存状況は良好である。

銅鏃 4 第四段に収納された銅鏃は 1 点である。腸扶柳葉式で亜種頸部（篋被）をもつ型式である。残存長は 8.2cm、重量は 20.6g である。刃部先端と腸扶先端の一部が欠損するほか、刃部端は細かく欠損するが、形態はほぼ復元可能である。鏃身の残存長は 4.3cm、復元すれば 4.4cm ほどで、鏃身平面は、側線は緩い S 字カーブを描き、鏃身先端より約 1.5cm の位置で幅 1.8cm となる。鏃身下半にかけてわずかに鏃身幅を狭めてから、腸扶先端が鏃身最大幅となり、約 2.0cm に復元される。側面からみると、鏃身幅が狭くなると厚さも薄くなり、そこから鏃身端へと厚みを増して鏃身と亜種頸部の接する中心付近で、最大厚は 7.2mm となる。腸扶をもち、腸扶内側は、丁寧に研磨されている。鏃身と亜種頸部の境にはわずかに段をもつ。全体に丁寧に研磨されるが、鏃身には鑄に向かって斜め方向の擦痕が多数残る。鏃身中軸に沿って鑄を持ち、鏃身の断面形は扁平な菱形である。亜種頸部の長さは鑄と接する鏃身端から計って 1.8cm と長く、頸部端は幅 1.2cm、厚さ 1.1cm とやや横に広い円形である。頸部端は平滑に削られている。茎部は長さ 2.8cm、頸部関付近で太さ約 0.5cm とやや太い。茎部断面はほぼ円形に近い多角形で、茎部端に向かい細くなる。端部は鑿で切り離れたままである。茎部に鑄型の合わせ目や鑄型ズレの痕跡は確認できない。茎部表面には主軸に沿って細長い削り痕がみられ、横あるいは斜め方向の擦痕を残す。矢柄痕跡は確認できない。一部に鉄錆や粘土が付着し、銅鏃表面の剥落した部分は、錆により青緑もしくは黒色化するが、それ以外の部分は、鈍い白銀色の光沢を残す白銅質の銅鏃である。

鉄鏃 1 残存長 5.8cm の短頸の腸扶柳葉式鉄鏃である。刃部の一部と片方の腸扶先端、茎部端が欠損する。鏃身から短頸部にかけて錆による剥落が進む。実測作業による棄損を恐れたため、断面図は略測であり、側面図は作成できなかった。鏃身は全長 4.2cm、鏃身最大幅は腸扶先端であり、図上で復元すると 1.8cm 程に復元できる。鏃身平面形は、鏃身上半はややふくらをもつものの、柳葉式に特有の S 字カーブはほぼ失われて、鏃身は三角形化が進む。鏃身断面は、厚さ 3mm 前後の

扁平なレンズ状である。腸袂の内側は明瞭な面をもち、腸袂奥は明確な屈曲をもつ。腸袂奥から頸部関までは短頸部状で長さ 1.5cm、鍔身付近で幅約 0.6cm であるが、頸部関までにゆるやかに幅を広げて約 0.8cm、厚さ約 0.5cm となる。頸部の断面形は明瞭な長方形である。頸部関から茎部へは、一段低くなる。茎部の残存長は 1.1cm で、断面は四角形である。矢柄痕跡は確認できなかった。(水野)

⑧ 刀 (図 12、図版 7-8)

収蔵箱の第三段に 1 点の刀装具破片がある。ラベルはなく、出土地不明の資料となる。木製柄間片であり、残存長 3.95cm、残存幅 1.1cm、柄に巻いた銀線の一部 (11 巻分) が残存している。銀線の下には緑青が確認されるため、金銅製刀装具がともなった可能性がある。倭系装飾付大刀に復元できるものと考えられる。(林)

② 耳環 (図 12、図版 7-5)

収蔵箱の第三段に耳環が 2 点、第四段に 2 点ある。うち 1 点は出土地を記したラベルが存在し、ほか 3 点はラベルなどが存在しておらず、出土地不明の資料となる。なお、計測位置については[岩本(編) 2018] に準拠した。

1 は収蔵箱の第三段にあり、中実の銅芯銀薄板張りであり、外径 2.8～2.9cm、内径 1.5cm、太さ 6.5～7.5mm、端面 5.5～7mm である。外面に直径 1mm ほどの円形の浅いくぼみが 2 か所確認される。両端面には、直径 2mm ほどの円形の浅いくぼみが確認される。

2 は収蔵箱の第三段にあり、中実の銅芯金薄板張りと考えられる。外径 2.25～2.55cm、内径 1.45cm、太さ 5.5～7mm、端面は 4.5～7mm である。全体のほとんどが酸化銅に覆われており、調整痕などは確認できなかった。

3 は収蔵箱の第四段にあり、ラベルには「同国式上郡卷向村字豊前古墳発出」とある。中実の銅芯金箔張りであり、外径 1.9～2cm、内径 1.2cm、太さ 3～5mm、端面 3～5mm である。両端面には金箔を寄せた痕跡が確認される。外面には、金箔を張り付けた際に生じた皺、直径 1mm ほどの円形の浅いくぼみ、工具による調整の細かな凹凸が確認される。

4 は収蔵箱の第四段にあり、ラベルには「大和国式上郡慈恩寺村字西垣内発出」とある。中空であり、銅管芯金箔張りと考えられる。外径 2.2～2.4cm、内径 1.3cm、太さ 5.5～7mm、端面は破損しているため不明である。全体的にねじれており、破損している箇所も複数見受けられる。外面に直径 1mm ほどの円形の浅いくぼみが確認される。(林)

⑧ 空玉 (図 12、図版 7-6)

収蔵箱の第四段に 10 点の空玉が連結された状態で確認され、ラベルには「大和国山辺郡朝和村大字萱生古墳発出」とある。

いずれも金銅製であり、おおむね 5mm の大きさである。紐を通す孔径は、小さいもので 1mm、大きいもので 2mm である。若干歪みを持った円球の空玉があるものの、複数の空玉の外面に縦方向の筋状の痕跡が見られることから、プレス式鍛造技術である可能性を指摘できる。二つの半球状のものを合せることで一つの玉が作られており、繋ぎ目に黒色の物質が確認されることから水銀もしくは銀と銅の合金による蠟付け法 [塚本 2012] で接合しているものと推察される。繋ぎ目に集中して浅い円形のくぼみなどが観察でき、最終調整として工具による整形がおこわれている。(林)

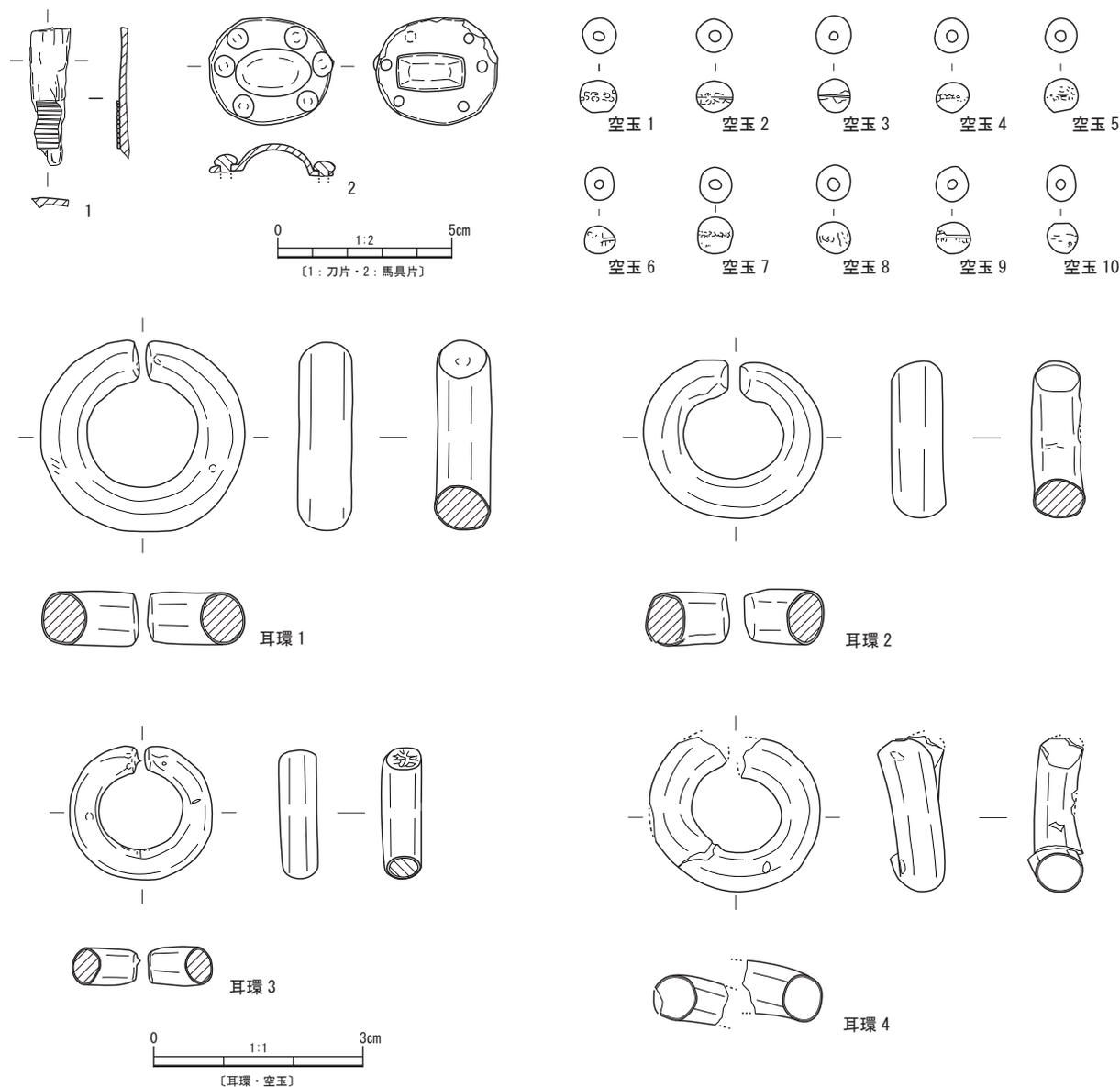


図 12 刀・耳環・空玉・馬具

⑨ 馬 具 (図 12、図版 7-9)

収蔵箱の第三段、金銅装鏡板付轡の一部が確認される。ラベルはなく、出土地不明の資料となる。金銅装鏡板付轡の鉄地金銅張り銜端覆金具であり、全周する鍔をもつ楕円の丸帽子形を呈す。鍔部分に脚を欠損した鉾が6つ確認され、轡本体に固定されていたと考えられる。長径 3.5cm、短径 3.0cm、高さ 9mm、厚さ 1~2mm、鉾頭径 6~7mm、鉾頭高 2.5mm、鉾脚径 2.5~3mm である。金銅板の折り返し端部が部分的に遺存する。(林)

3. 資料群の位置づけと評価

ここまでの事実記載をふまえて、品目ごとの位置づけを今日的な学術水準から確認する。そのうえで、本間美術館所蔵の古墳時代資料のなかでもとくに注目すべき伝・ウブコ塚と伝・東良山の遺物組成を検討し、資料群の評価と意義を明らかにする。(岩本)

(1) 各品目の位置づけ

① 三角縁神獣鏡

三角縁神獣鏡は7片で5面分を確認できる。出土地ごとの内訳は伝・ウブコ塚1面、伝・東良山3面、不明1面である。いずれも破片資料であるが、「同範鏡」が存在するため全体像を復元することが可能である。伝・ウブコ塚鏡は三角縁神獣鏡目録の46鏡、三角縁・天王日月・獣文帯四神四獣鏡（平均直径22.4cm・神獣象表現②・神獣像配置A）である。「同範鏡」は福岡県神蔵古墳、山口県竹島御家老屋敷古墳、京都府椿井大塚山古墳〔M13・14・15〕、神奈川県加瀬白山古墳から出土した6面がほかにある。舶載三角縁神獣鏡でも古相を示す例であり、筆者の鏡群分類ではF1群に該当し、舶載第2段階に位置づけられる〔岩本2020〕。伝・東良山では3面の三角縁神獣鏡を確認できる。32a鏡は三角縁吾作四神四獣鏡（直径22.4cm・神獣象表現⑦・神獣像配置E）でB1群に属し、舶載第2段階に比定できる。「同範鏡」には伝・兵庫県播磨とされる1面がほかにある〔岸本2012〕。52鏡は三角縁陳是作四神四獣鏡（平均直径22.0cm・神獣象表現⑥・神獣像配置A）でB2群に該当し、舶載第2段階となる。「同範鏡」は奈良県黒塚古墳鏡〔6号鏡〕、伝・群馬県三本木鏡の2面がほかにある。71鏡は三角縁・天王・日月・獣文帯四神四獣鏡（平均直径22.0cm・神獣象表現②・神獣像配置F1）でF1群に属し、舶載第2段階となる。「同範鏡」は奈良県新山古墳鏡〔官96〕の1面がほかにある。伝・東良山鏡の3面はいずれも舶載第2段階に位置づけられる古相の舶載三角縁神獣鏡であり、時期的なまとまりが良好である。このほか、出土地不明の例が138鏡の三角縁波文帯三神四獣鏡（平均直径20.9cm・神獣象表現③・神獣像配置特殊）である。「同範鏡」は伝・岡山県一宮鏡、奈良県鴨都波1号墳鏡〔棺外鏡3〕の2面がほかにある。鏡群分類ではJ2群に該当し、舶載第5段階に位置づけられる。

以上の分類上の位置づけをふまえると、それぞれの副葬上限年代は、伝・ウブコ塚鏡と伝・東良山鏡は広域編年Ⅰ期（古墳時代前期前半古相）、出土地不明鏡は広域編年Ⅲ期（古墳時代前期中葉）に求められる〔岩本2020〕。

（岩本）

② 玉 類

伝・ウブコ塚 勾玉1点、管玉5点、小玉1点がある。勾玉は翡翠製で丁字頭をもち、古墳時代前期の「O型」〔大賀2013a〕に相当する。管玉は半島系1点、北陸系5点からなる。北陸系のは法量領域F〔大賀2013a〕に該当する太型品で、古墳時代前期後半に盛行する種類である。ただし、メスリ山古墳や弁天山C1号墳のように、領域Fの管玉をまとまったセットで副葬し、円筒埴輪編年のⅠ期中相〔廣瀬2015〕の埴輪をとともなう古墳もみられる。この点をふまえると、大賀〔2013b〕の編年表で示唆されるように、大賀前Ⅳ期（前期中葉）を領域Fの管玉がまとまったセットで副葬品組成に加わりはじめる移行期とみなしうる。小玉は翡翠製で類例は少ない。写真と実測図のみからの判断で、本資料よりもややサイズが小さいが、東大寺山古墳出土品〔金関ほか編2010〕が類似する資料としてあげられる。

伝・東良山 勾玉1点、管玉9点がある。勾玉は翡翠製で丁字頭をもち「O型」に相当する。管玉は半島系2点、山陰系（領域JFb）2点、北陸系5点（領域Se1点、領域F4点）、からなり、古墳時代前期後半に盛行する太型品を主体とした構成である。

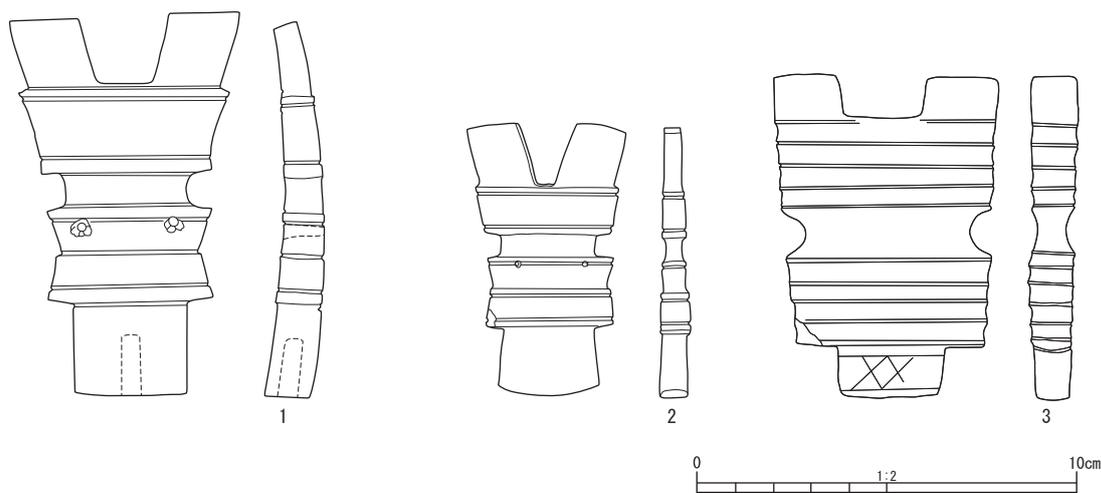
そのほかの資料 勾玉3点は古墳時代の玉に類例が乏しく、後世の模造品の可能性を考慮する必要もあり評価が難しい。管玉4点のうち、萱生出土の1点は半島系で、古墳時代では前期に流通量が多い種類である。石上神宮禁足地出土の1点は北陸系の太型品で古墳時代前期後半に位置づけられる。

慈恩寺旧蔵の1点と伝西殿塚出土の1点は山陰系でも片面穿孔されるもので、TK23～TK47型式期以降に下る。水晶製切子玉は山陰系のなかでも大型化が進んだものに相当し、古墳時代後期でも新しい時期に位置づけられる。ガラス小玉は、コバルト着色の小型品と銅着色でも高Alソーダ石灰ガラス(Group S II)で端面研磨の進んだものが主体であり、これらは大賀[2020]の様相7(古墳時代中期前半)に該当する。ただし、コバルト着色で大型の3点はTK208型式期以降に流通する植物灰ガラス(Group S III B)[大賀2020]とみられ、大型の5点は出土古墳が異なるとするラベルの記載と整合的に理解できる。(上野・谷澤)

③ 石製品

伝・ウブコ塚 石釧の製作時期は、2点とも筆者の編年[二村2022]で段階Ⅲに位置づけられ、岩本崇による古墳の広域編年[岩本2020]においてⅢ期(前期中葉)からⅣ期(前期後半古相)に相当する⁽¹⁰⁾。鍬形石および紡錘車形石製品は、濃緑色の硬質石材(Ⅰ群)が用いられ、後者の各段の幅が不均等であることからⅢ期(前期中葉)以前に製作されたと考えられる。以上の資料状況から、伝・ウブコ塚の石製品は前期中葉の中でも前期後半に近い時期に位置づけられる。円筒埴輪編年との対応においては東殿塚古墳がⅠ期中相[廣瀬2015]、Ⅰ-3期[埴輪検討会事務局2022]に位置づけられており、これらの段階の埴輪は石釧段階Ⅱ～Ⅲと併行関係にあることから、本資料が東殿塚古墳出土石製品であることに年代的な矛盾はない。

石上型[亀井1973]の琴柱形石製品は、従来は他型式の琴柱形石製品やその他副葬器物との共伴事例が知られていなかったが、本資料群によって他器種の石製品との年代的接点を得た。石上型は、反りの消失と縦軸作出の省力化を变化の方向性として想定して、器体が大きく反り縦軸と上下の横軸が明瞭な角で区画される1式、反りが消失し縦軸と上下の横軸が明瞭な角で区画される2式、反りは無く縦軸と上下の横軸の境界が曖昧で縦軸が左右からの円い挟りによって作出される3式の順で組列が措定される(図13)。伝・ウブコ塚の石製品は突起部の厚みが先端に向かって小さくなる形態から、反りをもっていた可能性が高く、1式に該当すると考えられる。反りの消失は、松林山型[亀井1973]・雪野山類型[北條1996]にもみられ、両者の変化が併行している可能性が指摘できる。



1:石上型1式(出土地不明・関西大学博物館所蔵) 2:石上型2式(奈良県天理市豊田出土)
3:石上型3式(奈良県王寺付近出土)

図13 石上型琴柱形石製品の分類

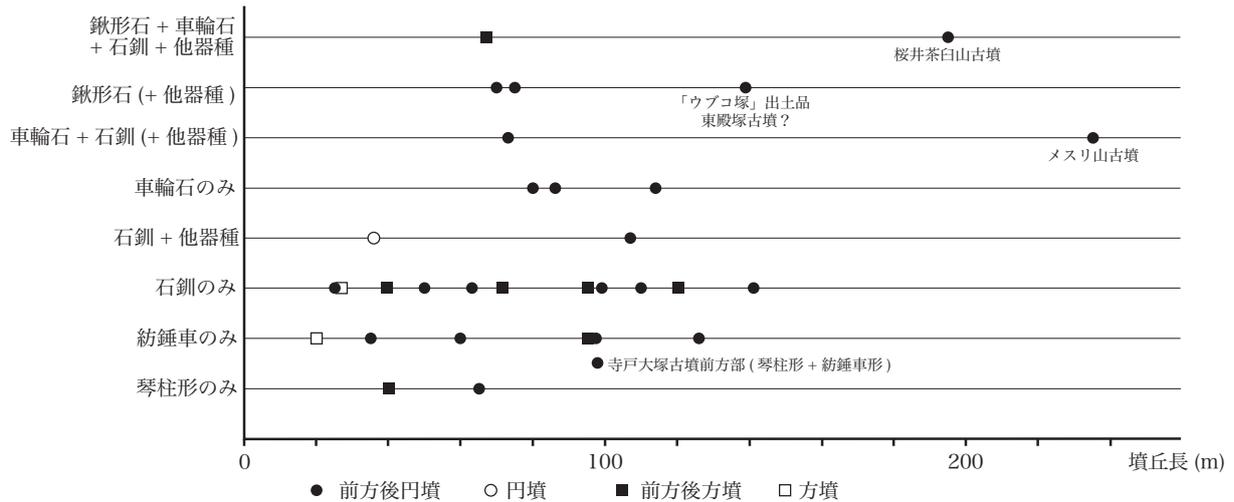


図 14 前期中葉までに製作された石製品の副葬古墳の墳形・規模

「曇如上人遺愛」車輪石 本資料で採用されている回転穿孔技術は、石釧では前期中葉に採用が本格化することから [二村 2022]、本資料も前期中葉以降に製作された可能性が高い。また、硬質石材の使用や上げ底の作出といった属性は、三浦俊明の指摘の通り古相を示す [三浦 2005]。したがって、本資料の製作時期は前期中葉（広域編年Ⅲ期）と考えられる。

「高槻山」出土石釧 本資料の製作時期は筆者の編年 [二村 2022] で段階Ⅲに位置づけられ、岩本崇による古墳の広域編年 [岩本 2020] においてⅢ期（前期中葉）からⅣ期（前期後半古相）に相当する。

器種の組合せからみた組成的評価 伝・ウブコ塚の石製品の組成は、鍬形石・石釧・琴柱形石製品・玉杖・紡錘車形石製品からなり、鍬形石や玉杖を含む階層的に上位の組合せとなる。桜井茶白山古墳やメスリ山古墳など、鍬形石や玉杖を含む組合せは奈良盆地東南部では大型の前方後円墳に副葬される傾向が顕著であり（図 14）、全長 139 m の前方後円墳である東殿塚古墳から本資料群が出土したと考えて矛盾はない。

製作技術からみた組成的評価 本報告でとりあげた石釧の組成は、回転穿孔後に内面形状を変化させる調整をおこなわない A 系群と、回転穿孔後に下側から研磨調整する B 系群からなる [二村 2022]。また、「曇如上人遺愛」車輪石は回転穿孔後に部分的に片側から研磨調整をおこなう点で石釧 B 系群と技術的に共通し、筒形石製品は内面全体に回転穿孔痕がみられる点で石釧 A 系群と技術上の接点をもつ。以上より、石釧 A 系群および B 系群とその関連資料群からなる組成が本間美術館所蔵資料全体に通ずる特徴といえる。この特徴は、奈良盆地東南部に流通した石製品の組成的特質を反映している可能性がある。（二村）

④ 銅鏃・鉄鏃

銅鏃 4 点、鉄鏃 1 点が確認できた。出土地ごとの内訳は、伝・ウブコ塚に銅鏃 1 点、伝・東良山に銅鏃 1 点、伝・柳本村古墳の銅鏃 1 点、出土地不明に銅鏃 1 点、鉄鏃 1 点である。銅鏃は編年が完成しておらず、時期的な位置づけは難しいが、類例から考えてみる。

伝・ウブコ塚（銅鏃 1）は、鑿頭式銅鏃で、鏃身断面が円形の特徴をもつ。神奈川県真土大塚山古墳、兵庫県松田山古墳などに鏃身断面が円形の定角式銅鏃の例があるが、鑿頭式銅鏃で鏃身断面が円形のもの三重県石山古墳例があるものの類例はきわめて少ない。石製鏃では、京都府園部垣内古墳、奈良県富雄丸山古墳に同型式が確認できるが、鏃身の長大化が進んでいる。同型式の類例は古墳時代前

期後半に集中するが、銅鏃1の形態はそれらより古相で、茎部に鋳型のズレ痕を残す点で銅鏃としても古相を示す。真土大塚山古墳の築造時期が参考となるとみられる。伝・東良山は、十字鏃をもつ柳葉式銅鏃である(銅鏃2)。同型式は、群馬県前橋天神山古墳、静岡県新豊院山2号墳、京都府妙見山古墳、福岡県潜塚古墳などにあり、銅鏃2と法量も近く、これらの古墳築造時期と近接する可能性が高い。伝・柳本村は、亜種頸部をもつ腸袂柳葉式銅鏃である(銅鏃4)。この型式は奈良県ホケノ山古墳から三重県石山古墳までに確認でき、有稜系銅鏃の出現段階から銅鏃の終焉までのもっとも存続時間の長い型式である。銅鏃3は、石山古墳例に比べて鏃身の長大化や鏃身形の三角形化が進まない点から石山古墳例よりも古相であるが、亜種頸部が長大化しており、石上神宮出土品と比べて新相である。茎部は鋳型のズレ痕跡を残さない断面が円形であり、ホケノ山古墳例よりも明らかに新相であり、奈良県桜井茶臼山古墳以降とみられる。出土地不明の銅鏃3は、通有の柳葉式銅鏃である。型式的な特徴は、鏃身最大幅と鏃身関の幅が近く、鏃身関で最大厚となる。また、鏃身残存長は3.1cmと小型で、鏃身平面形の崩れは目立たない。茎部が長く、やや幅広の円形と新相を示す。奈良県メスリ山古墳以降とみられる。同じく出土地不明の鉄鏃1は、腸袂柳葉式鉄鏃である。細部が確認できていないが、鏃身のふくらは失われて三角形化と短頸化が進んでおり、前期後半以降とみられる(水野前期3段階以降)[水野2013]。(水野)

⑤ 刀

出土地不明の刀柄間片が1点確認できる。小片のため、詳細な時期や類例などを特定することは困難であるが、銀線蔓卷であることと金銅製刀装具を備える可能性から、大谷分類I段階(TK43型式期)を中心とした時期に位置づけられると考える[大谷1999・2014]。(林)

⑥ 耳環

耳環は4点存在しているが、大きさや構造に共通性がみとめられず、セット関係は確認されない。時期的な位置づけには、外径と材の太さに着目した横田真吾の研究を参考にすれば[横田2018]、2は飛鳥I期(古相)、豊前古墳出土の1はTK43型式期、3は飛鳥II・III期、慈恩寺村字西垣内出土の4は飛鳥I期(新相)となる。(林)

⑤ 空玉

萱生古墳出土の空玉が10点確認される。管見の限り、空玉にかんしては、編年研究よりも製作技術を主とした研究がなされているようである[塚本1994]。現状では位置づけが難しく、今後の研究の進展を待ちたい。(林)

⑦ 馬具

金銅装鏡板付轡の鉄地金銅張り銜端覆金具が1点確認されているものの、出土地については不明である。形状および銜の数から奈良県三里古墳出土鐘形鏡板や千葉県城山1号墳出土斜格子文楕円形鏡板に類例を求めることができる。両古墳の馬具の年代はTK43～TK209型式期に相当することから[内山1996・松尾1999]、当資料も同時期に位置づけられると考える。(林)

(2) 副葬品の組成と時期の評価

本間美術館所蔵の古墳時代資料は伝世資料であり、出土経緯が確実ではないものの、現状での組合

せを前提に、伝・ウブコ塚と伝・東良山の資料群を評価してみよう。両資料群は、ともに銅鏡・玉類・石製品・銅鏃の組合せで構成されている。各報告での情報を参照しつつ資料を概観し、時期の比定とそれぞれの組合せがもつ特徴を整理する。

伝・ウブコ塚 銅鏡は、三角縁・天王日月・獣文帯四神四獣鏡（目録46鏡）に該当する。四神四獣配置をもつ表現②の一群であり、5段階に分けた舶載三角縁神獣鏡の第2段階に位置づけられ、多くの編年案が採用する舶載三角縁神獣鏡の製作を三つに区分する分類では、4分割原理の古相に該当する〔岩本2020〕。玉類は、勾玉が翡翠製で、丁字頭をもち、前期の「O型」に相当し、管玉は半島系1点と北陸系5点で、北陸系は領域Fの法量をもち前期中葉後段から前期後半の太型品に該当する〔大賀2013a・2013b〕。石製品は、紡錘車形石製品、筒形石製品と琴柱形石製品、そして腕輪形石製品で構成している。紡錘車形石製品は、各段の幅が不均等な古相に位置づけられ〔西島2008〕、硬質濃緑色の緑色凝灰岩（材質1・I群）を用材とした前期中葉以前の製作を想定する〔北條2013、二村2022〕。筒形石製品は、桜井茶白山古墳やメスリ山古墳で出土する玉杖の構成部材であり〔清喜2005、北山2008〕、琴柱形石製品は石上神宮禁足地出土品を標識とする石上型に該当する〔亀井1973〕。腕輪形石製品は、鋏形石1点と石釧2点であり、鋏形石は、硬質濃緑色の緑色凝灰岩（材質1・I群）を用材とし、内孔横に突起部をもつ3段階以前の製作を想定する〔北條1994、二村2022〕。石釧は、1点（石釧1）が山式の肋条表現に一凹式の側面装飾をもち、1点（石釧2）は山谷式の肋条表現をもつ〔蒲原1991、森下2005〕。ともに、肋条の櫛歯を陰刻で表現し、区画横帯が正位置にある特徴をもち、軟質淡緑色の緑色凝灰岩（材質3・III群）の利用が始まる、石釧の生産が多様化する段階の製作を想定する〔上田2018、二村2022〕。銅鏃は、鏃身断面が円形をなす鑿頭式で、類例は僅少であるが、鑄型のズレ痕を茎部にもち、古相の銅鏃に位置づけられる〔高田2013〕。二つの特徴から、真土大塚山古墳の定角式銅鏃との関連を想定している。

いずれも、前期古墳の副葬品の範疇でとらえられる。各種資料の形態特徴は、その初出時期（副葬開始時期）に照らすと、以下のように整理できる。ここでは、当該資料（当該型式）を時期区分指標としてあつかう編年に限り表記した〔大賀2002・2013a・2013b、森下2005、岩本2020〕。

銅鏡：前期前半古相（森下組合1、大賀前II期、広域編年I期）

半島系管玉：前期前半古相（大賀前I期）

翡翠勾玉（O型）：前期前半古相（大賀前III期、広域編年II期）

北陸系管玉：前期中葉後段～後半古相（大賀前IV期後半～前V期、広域編年III/IV期）

紡錘車形石製品：前期前半古相（広域編年I期※）

筒形石製品：前期前半古相（大賀前III期、広域編年II期）

鋏形石：前期前半古相（広域編年II期）

石釧：前期中葉（森下組合2、広域編年III期）

※これのみ出土古墳（初出）の時期区分を示した。

伝・ウブコ塚の資料群を同一古墳の副葬品ととらえるならば、もっとも後出する北陸系管玉を基準として、前期中葉後段～後半古相（大賀前IV期後半～前V期、広域編年III/IV期）に時期を比定するのが妥当である。ただ、初現が前期前半古相にさかのぼる資料を主体とした構成であり、古相の性格が強いことから、同類の管玉を初現期でとらえ、この組合せを前期中葉後段と位置付けておきたい。玉類の報告にもあるように、メスリ山古墳や弁天山C1号墳などと同時期に位置づけられよう。

書付にある東殿塚古墳は、埋葬施設の調査がなく、副葬品の実態は未詳である〔東1981、木下2001〕。鱗付円筒埴輪などが出土しており、本節③項でふれるように、円筒埴輪編年のI期中相もし

くはI-3期に位置づけられ〔廣瀬2015、埴輪検討会事務局2022〕、伝・ウブコ塚の組合せを前期中葉後段から前期後半古相（広域編年Ⅲ～Ⅳ期）とみる見解には整合する。副葬品の組合せは、東殿塚古墳の比定時期に相応するといえよう。今回の調査・検討による成果と埴輪の所見から、伝・ウブコ塚の資料群が東殿塚古墳の副葬品である可能性は高いとみる。

一方、この組合せには、初出時期（古墳への副葬の開始時期）との隔たりをもつ資料がみえる。その隔たりは、銅鏡と半島系管玉が前期編年2～3期程度でもっとも長く、紡錘車形石製品や筒形石製品、鍬形石が1～2期程度でそれに次ぐ。一方で、銅鏃や石釧、北陸系管玉は初出時期に近く、時間の隔たりはない。あくまで初出時期との対応であり、長期保有は必然ではないが、銅鏡などには長期保有を経た可能性が想定できる。伝・ウブコ塚資料の構成は、長期保有の可能性のある資料と同時期の生産品との組合せとして評価できよう。

伝・東良山 銅鏡は、三角縁吾作四神四獣鏡（目録32a鏡）と三角縁陳是作四神四獣鏡（目録52鏡）、三角縁・天王・日月・獣文帯四神四獣鏡（目録71鏡）である。いずれも、四神四獣配置の4分割原理であり、5段階に分けた舶載三角縁神獣鏡の第2段階に位置づけられ、多くの編年案が採用する舶載三角縁神獣鏡の製作を三区区分した古相に該当する〔岩本2020〕。玉類は、勾玉が翡翠製で、前期の「O型」に相当し、管玉は半島系2点と山陰系2点、北陸系5点であり、大半（山陰系2点と北陸系4点）が領域F・JFbの法量であり、前期後半の太型品に該当する〔大賀2013a〕。銅鏃は、十字鑄をもつ柳葉式であり、法量の近似する規格性の高い一群である。鏃身幅に応じて厚さが変わり、丁寧な研磨をもつことから、相対的に古相の銅鏃に位置づけられよう〔高田2013〕。

伝・東良山の各資料について、その形態特徴の初出時期（副葬開始時期）に注目すれば、以下のよう整理できる。ここでも、当該資料（当該型式）を時期区分指標としてあつかう編年に限り表記した〔大賀2002・2013a・2013b、森下2005、岩本2020〕。

銅鏡：前期前半古相（森下組合1、大賀前Ⅱ期、広域編年Ⅰ期）

半島系管玉と北陸系管玉（領域Se）：前期初頭（大賀前Ⅰ期）

翡翠勾玉（O型）：前期前半新相（大賀前Ⅲ期、広域編年Ⅱ期）

山陰系管玉（領域JFb）・北陸系管玉（領域F）：前期中葉後段～後半古相（大賀前Ⅳ期後半～前Ⅴ期、広域編年Ⅲ/Ⅳ期）

伝・東良山の資料群を同一古墳の副葬品ととらえるならば、太型品の玉類を基準として、前期中葉後段～後半古相（大賀前Ⅳ期後半～前Ⅴ期、広域編年Ⅲ/Ⅳ期）に時期を比定するのが妥当である。紫金山古墳や妙見山古墳、平尾城山古墳などと同時期に位置づけられよう。やはり、この組合せでも、銅鏡が初出時期（副葬開始時期）との間に長い時間の隔たりを生じることになる。伝・ウブコ塚資料と同じく、前期編年3期程度の隔たりが生じる。銅鏃も、古相として評価すれば、銅鏡ほどでないにせよ、時間の隔たりを見積もりことは可能であろう。

書付の「東良山」から想定される燈籠山古墳は、埋葬施設の調査がないものの、埴製枕、玉類（勾玉・管玉）、石製品（石釧）の出土を伝えている〔東1981、木下2001〕。玉類と石製品は現存していない（所在不明である）が、伝・東良山の資料群が勾玉と管玉を含むことは注目してよい。なお、埴製枕は、1896（明治29）年に出土したことが判明しており〔東1981〕、時間は多少前後するが、1章で指摘する収蔵経緯との接点も見いだせる。伝・東良山の資料群が燈籠山古墳の出土品である可能性は十分にある。

埴輪では、円筒埴輪片や朝顔形埴輪片が採集され、巴形透孔や精良なタガ形状など古相の様相がみえ、伝・東良山の組合せとおおむね対応するとみるが、今日的な視点での埴輪の検討をふまえれば、伝・

東良山との関係もより明瞭になると思う。

(上野)

まとめ

本報告では新出の古墳時代資料として本間美術館の考古資料に着目し、その資料化と報告をおこなうとともに、個々の資料の位置づけを検討した。資料群のなかでもとりわけ重視されるのは、奈良盆地東南部からの出土が伝えられるウブコ塚と東良山の資料群であり、伝・ウブコ塚は東殿塚古墳、伝東良山は燈籠山古墳に比定しうる蓋然性が高いことをその時間的位置づけや品目の内容から明らかにした。この出土古墳の比定が正しければ、奈良盆地東南部において三角縁神獣鏡の副葬はしばしばおこなわれていたこと、三角縁神獣鏡でも舶載鏡の古相の例に「伝世」あるいは「長期保有」を想定しうること、鏡だけでなく玉類の「伝世」あるいは「長期保有」が有力古墳においてみだされることになる。このように、本間美術館所蔵の古墳時代資料は、奈良盆地東南部の前期古墳あるいは古墳時代前期の王権構造を考えるうえで示唆に富む内容を備えているといえよう。発掘調査によって得られた資料ではないものの、これらの資料が今後に資することを期待して本報告を攷筆する。(岩本)

付記

本稿は、2019年11月19～21日に本間美術館において実施した共同調査の成果報告である。共同調査には岩本崇、阪口英毅、上野祥史、水野敏典、谷澤亜里、二村真司、林弘幸の7名が参加した。報告にあたっては、参加者の協議のもと執筆分担を決定し、全体のとりまとめを岩本が担当した。その過程で資料収蔵の経緯について記述しておく必要があると考え、当該部分の原稿を本間美術館学芸員の阿部誠司氏に執筆いただいた。調査の実施に際してご高配をいただいた、本間美術館ならびに阿部氏にはこの場をお借りして篤く御礼を申し上げる。

なお、共同調査の実施から約1年後の2020年12月15日に阪口英毅さんがご逝去された。本報告に執筆いただくことは叶わなかったが、共同調査の実現において阪口さんの後押しが大きな原動力となったこと、調査実施時においても大いに力を尽くされたことをここに記しておきたい。

註

- (1) 羽柴雄輔〔1851(嘉永4)年～1921(大正10)年〕は、旧松山町(現在の酒田市)出身の郷土史家である。考古学・民俗学・人類学を研究し、「奥羽人類学会」を創設した。おもに山形県庄内地方についての研究が多く、奈良県で活動した形跡はみあたらない。本間家との直接的な関わりも不明である。晩年は、慶應義塾大学図書館に勤務〔土岐田1988〕。
- (2) 斎藤美澄〔1857(安政4)年～1915(大正4)年〕は、酒田市出身の郷土史家で、上日枝神社の宮司である。『古事記』や『日本書紀』に造詣が深く、1880(明治13)年には招かれて大和国大和神社の神職となり、奈良県知事の委嘱を受けて『大和志料』〔齋藤編1914〕の編纂にあたった。1892(明治25)年には三輪神社の宮司も務めている〔田村1988〕。1893(明治26)年に帰郷して吹浦大物忌神社宮司となり、1917(大正6)年まで務める。その後、上日枝神社社司となり、そのかわり『飽海郡誌』の編纂に従事した。郷土史家としても精力的な仕事をし、連日のように羽織袴姿で本間家に勤め、膨大な「本間家史料」の整理編纂に従事した。
- (3) このたび報告する本間美術館所蔵考古資料のなかには、斎藤美澄が宮司を務めていた三輪神社に関係した資料として収蔵箱第四段に1点と1組が確認される。
- (4) 考古資料ではないものの、奈良県からの帰郷時に持参したと考えられるのが「大和國各所出顯古物圖(1枚)」である。当資料は、帰郷翌年の1894(明治27)年に奥羽人類学会へ寄贈している〔東京人類学会1894〕。現在その行方は不明であり、羽柴雄輔関係資料を多く所蔵する慶應義塾大学図書館、庄内一円の史

料の収集・整理・研究をしている鶴岡市立郷土資料館、松森胤保（奥羽人類学会会長）関係資料を所蔵している酒田市立光丘文庫の各機関所蔵史料のデータベースには存在していない。

- (5) 石鏃の形態や石材は、東北地方の縄文時代遺跡で出土するものと差がなく、奈良県内の石鏃に多いサヌカイト製の個体をまったく含まないことから、奈良県内での採集品とする積極的な根拠はみあたらない。むしろ、ほかの収蔵箱の資料とは異なる入手経路が想定される。
- (6) 天理市教育委員会文化財課のご教示による。
- (7) 以下では、三角縁神獣鏡の神獣像表現は岸本直文の分類〔岸本1989〕、神獣像配置は小林行雄の分類〔小林1971〕にしたがう。
- (8) 石材は岡寺の目視分類〔岡寺1999〕に修正を加え、色調と硬軟の差によって以下のⅠ～Ⅳ群に大別する。
Ⅰ群：濃緑～暗緑色の硬質石材で、しばしば「碧玉」と称される。比重が大きく、2.5～2.8前後である。
Ⅱ群：淡緑色の硬質石材で、比重にばらつきがあり（2.2～2.7前後）、将来的な細分を要する。
Ⅲ群：淡緑色で軟質の緑色凝灰岩で、比重が小さい（1.4～1.8前後）。硬質石材が風化により内部まで軟質化した場合もⅢ群に含めて分類する。
Ⅳ群：層状の葉理構造が発達する緑色凝灰岩で、比較的比重が大き（1.9～2.1前後）。
- (9) 天理市教育委員会文化財課のご教示による。
- (10) 筆者の石釧編年と岩本崇による古墳の広域編年〔岩本2020〕との対応関係を示すと、段階Ⅱ＝Ⅲ期（前期中葉）、段階Ⅲ＝Ⅲ～Ⅳ期（前期中葉～前期後半古相）、段階Ⅳ＝Ⅳ期（前期後半古相）、段階Ⅴ・Ⅵ＝Ⅴ期（前期後半新相）となる。

引用文献

- 東 潮 1981「燈籠山古墳」「東殿塚古墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊 奈良県教育委員会 pp.22-24,29-34
- 雨宮健祥 2019「三角縁神獣鏡の銘文字形分析」『東京大学考古学研究室研究紀要』第32号 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室 pp.35-71
- 岩本 崇 2020『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 上田直弥 2018「石釧型式の変遷と生産の画期」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室30周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 pp.385-398
- 内山敏行 1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 pp.42-47
- 大谷晃二 1999「第3節上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4 pp.134-148
- 大谷晃二 2014「上塩冶横穴墓群32支群出土の銀装大刀」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第4集 出雲弥生の森博物館 pp.1-10
- 大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 清水町教育委員会 pp.1-20
- 大賀克彦 2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』古代出雲における玉作の研究Ⅲ 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター pp.9-62
- 大賀克彦 2013a「玉類」『古墳時代の考古学』4副葬品の型式と編年 同成社 pp.147-159
- 大賀克彦 2013b「前期古墳の築造状況とその画期」『「前期古墳からみた播磨」記録集』第13回播磨考古学研究集会実行委員会 pp.61-96
- 大賀克彦 2020「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしへの河をのぼる 古川登さん退職記念献呈考古学文集』『いにしへの河をのぼる』制作委員会 pp.55-64
- 岡寺 良 1999「石製品研究の新視点—材質・製作技法に着目した視点—」『考古学ジャーナル』No.453、ニューサイエンス社 pp.24-27
- 金関 恕・小木田治太郎・藤原郁代（編） 2010『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会・天理大学・天

理大学附属天理参考館

- 亀井正道 1973 「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第8号 東京国立博物館 pp.31-170
- 蒲原宏行 1991 「腕輪形石製品」『古墳時代の研究』第8巻 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣出版 pp.131-146
- 岸本直文 1989 「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号 史学研究会 pp.1-43
- 岸本直文 2012 「兵庫県たつの市で確認された三角縁神獸鏡の新資料」『考古学雑誌』第96巻第3号 日本考古学会 pp.42-49
- 北山峰生 2008 「メスリ山古墳出土石製品の検討」『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学日本史研究室 pp.111-127
- 木下 亘 2001 「燈籠山古墳」「東殿塚古墳」『大和前方後円墳集成』学生社 pp.123-124,131-132
- 小林行雄 1971 「三角縁神獸鏡の研究—型式分類編—」『京都大學文學部研究紀要』第13 京都大學文學部 pp.96-170 (1976『古墳文化論考』平凡社 pp.303-377 に加筆のうえ再録)
- 齋藤美澄(編) 1914『大和志料』上巻・下巻 奈良縣教育會
- 齋藤美澄(編) 1923『飽海郡誌』巻一～巻十 山形県飽海郡
- 清喜裕二 2005 「桜井茶白山古墳出土の石製品」『桜井茶白山古墳の研究』大阪市立大学日本史研究室 pp.95-114
- 高田健一 2013 「銅鏃」『古墳時代の考古学』4 副葬品の型式と編年 同成社 pp.53-62
- 田村寛三 1988 「郷土の先人・先覚 74 郷土史家、「飽海郡誌」の編集にも従事 齋藤美澄」 荘内日報社 HP <https://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp74.html> (最終確認日: 2023年1月5日)
- 塚本敏夫 1994 「銀製空玉の製作技法」『団子塚9号墳出土遺物保存処理報告書』袋井市教育委員会 pp.147-156
- 塚本敏夫 2012 「⑦金銅・ガラス装飾」『古墳時代の考古学5 時代を支えた生産と技術』同成社 pp.154-170
- 東京人類学会 1894 「奥羽人類学会第四十八会記事」『東京人類学会雑誌』第10巻第103号 pp.41
- 土岐田正勝 1988 「郷土の先人・先覚 99 奥羽人類学会創設者 羽柴雄輔」 荘内日報社 HP <https://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp99.html> (最終確認日: 2023年1月5日)
- 奈良縣(編) 1925『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第八回 奈良縣
- 西島庸介 2008 「紡錘車形石製品の研究」『静岡県考古学研究』第40号 静岡県考古学会 pp.173-186
- 二村真司 2022 「石釧の生産と編年」『考古学研究』第69巻第1号 考古学研究会 pp.18-42
- 埴輪検討会事務局 2022 「埴輪検討会編年2022」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会シンポジウム2022資料集 埴輪検討会 pp.271-275
- 廣瀬 覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 北條芳隆 1994 「鉄鏃の型式学的研究」『考古学雑誌』第79巻第4号 日本考古学会 pp.41-66
- 北條芳隆 1996 「雪野山古墳の石製品」福永伸哉・杉井健編『雪野山古墳の研究』考察篇 雪野山古墳発掘調査団 pp.309-350
- 北條芳隆 2013 「腕輪形石製品」『古墳時代の考古学』4 副葬品の型式と編年 同成社 pp.160-177
- 松尾充晶 1999 「第4節上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4 pp.149-169
- 三浦俊明 2005 「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学研究室 pp.500-518
- 水野敏典 2013 「鉄鏃」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 pp.63-71
- 森下章司 2005 「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第89巻第1号 pp.1-30
- 山邊郡教育会(編) 1913『奈良縣山邊郡誌』中巻 山邊郡
- 横田真吾 2018 「熊本県熊本市宮穴横穴群出土の遺物について」『書陵部紀要』第69号〔陵墓篇〕 宮内庁書陵部 pp.25-40
- Oga, K. and Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical

compositions, chronologies, provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun periods (3rd Century BCE- 7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology* 9, 35-65.

図表出典

図1・5・8：岩本実測・製図。図2・6：上野・谷澤実測、谷澤製図。図3・10：二村実測・製図。図4・7・11：水野実測・製図。図9：上野・谷澤・阪口・水野実測、谷澤製図。図12：林・阪口実測、林製図。図13：亀井 1973：p.113 を二村製図。図14：二村作成。表1～5：上野・谷澤作成。